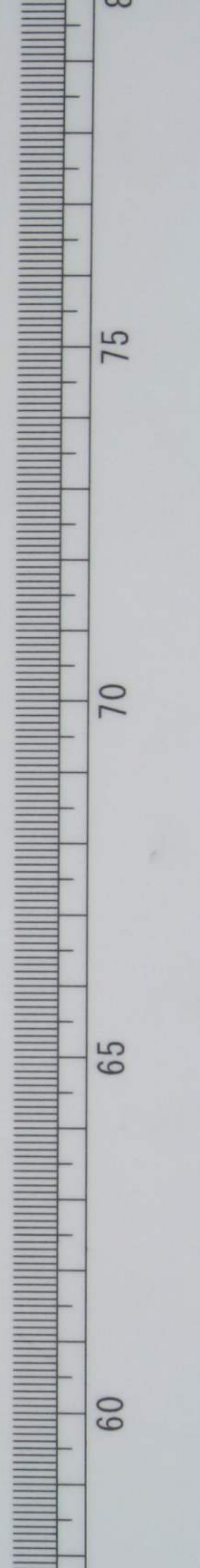




新刊和歌大要  
 興河野流抄著  
 東京大学図書蔵

本間文庫  
 文庫 14  
 D 64









京都深尾屋少藏清吉館

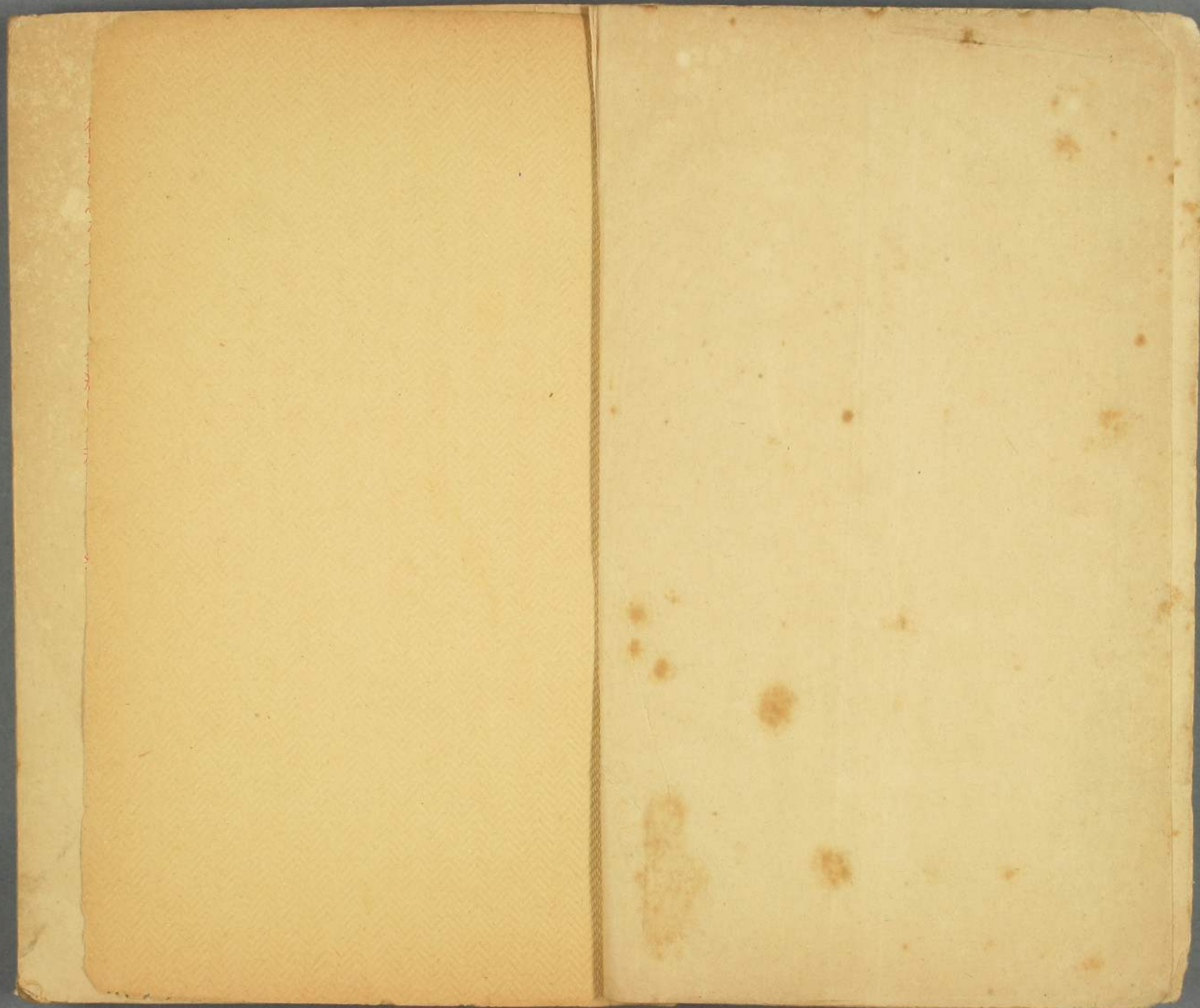


京都山本新井子切紙行



文庫14  
D64







はしがき

友人栗島狹衣君、自らわが座談の筆記と詩稿とを輯めて、新派和歌大要と題し、大學館主之が出版を望むよしを傳へ、頻に慫慂せらる。その稿本を見るに、卷初の座談は一編の詩論として固より備らず、且つ採録の長短詩中當然舊派に屬すべき舊作あり、如此きは宜しく削除すべきものなり。狹衣君聽かずして云く、是等を保存するは他日人の新派和歌の沿革を知らむとするに便なりと、わが性掩ふに慣れず、美醜併せて人前に舉出するは常なり、狹衣君の言よし、敢て刪らずして止まむか。即ち輕諾して別る。印刷後再び之を見るに、全編の分科甚だ整然たり、而もわが述作の實



質その美名に伴はず、慚愧の至なり。是等は狹衣君のわれに議するに違なくして附せる所なりと云ふ。

明治三十五年六月

與謝野鐵幹

目次

目	次
一 詩とは如何なるものぞ	一頁
二 三十一字の詩形	四
三 客觀詩	五
四 主觀詩	七
五 人間の慰藉	九
六 我が國の歌	一一
七 歌壇の衰頹	一二
八 新派の起原(和歌壇の革命)	一四
九 新詩形	二四
十 新詩評釋	三二
十一 新詩集	七四
虹影	七四



金桂	八六
赤裸裸歌	九三
夏草	一〇六
昨夜の君	一〇九
嘔血行	一一二
ふるあはせ	一一五
畫贊	一二一
獻贈	一二三
寒月孤影	一三四
梅花	一四〇
ひと夜語	一四一
高麗舊都歌	一五三
澁谷日記	一五六

# 新派和歌大要

與謝野鐵幹 著



## 一、詩とは如何なるものぞ

詩といふ語の由來をたづねるまでもなく、其如何なるものであるかを研究するのが、尤も必要な事と思はれる。併し此詩といふ語は英語の Poetry から來たのには相違ないけれども、廣く漢詩の上にもわが歌の上にも適用して差支ない語であるから、此處に「詩とは何ぞや」といふ問題を研究すれば、和歌といふもの、全體も從て解釋し得られるのである。そこで詩に就ての觀察には、先づ内容から見た實質の觀察と、外形から見た形式の觀察とがあつて、一は感想を研究する事、他の一つは言語文字の組立方多く修辭上の問題を研究する事なのである。

(一)



されば其外形そとがたから見た詩の意義はどうであるかといふのに、支那の學者の説には「詩は志のゆく所なり、心にあるを志に爲し言に發するを詩と爲す。」といひ、又は「思あれば則ち言なき能はず既に言あれば則ち言のつくす能はざる所にして、咨嗟咏嘆の餘に發するものは、必ず自然の音響節調ある已む能はざるなり、此れ詩の作れる所以」と説明されてあるが、疎豪な支那人の説では一向要領を得られないので、詩の意義も決してこれ位では盡きて居ない。第一詩には廣狹の二義を有して居る事を決定して置いてから、先づ人心の三面、即ち知情意何れにもとづくかを探たづねて見ねばならぬ。其の答辯には蓋し前に載せた漢儒の説の「情中に動き云々」といふのを以て明瞭に「詩は情の文なり」と謂ふ事が出来る。けれども情といふ事がまた漠然として居る。更に進んで其解説をもとめたならば、詩情といふものは自然と融合する同情性の感想、換言すれば美しい情こころといふ事になる。こゝを以て内容うらやまから見た廣意の詩といふものは、和歌漢詩俳諧小説脚本新體詩、これすべてそれであるといつても差支はない。

併し外形そとがたから見た時には、こゝに初めて定義として、

詩とは美しき感想を言語文字にあらはしたるものである

といふ事さへ言ひ得られる。そこで又之れを二つに別けて散文の詩と律語の詩といふ様にすれば、廣義の詩とは此散文の詩と律語の詩とを併せ得たもの、總稱で、狹義の詩といへば律語の詩であるといふ事がわかる。更にまたわが和歌といふものは律語の詩であるといふ事も合點がゆくのである。



二、三十一字の詩形

三十一字の詩形といふものは、尤もわが國で生命の永い詩形である。乃ち短歌は此生命の永い形式を續けて、希望のある勢力のある文學として研究されて居るのであるが、此外形から分類した詩の種類に就ていはうならば、まだ長歌もあれば旋頭歌もある、今様といひ長唄といひ端唄といひ發句といひいろ／＼さまざまであるけれども、これをまた内容から分類して見たならば、詩學上の定則通り、叙事詩といひ叙情詩といひ情景混融詩といはねばならぬ。所謂審美的本性から見た分類法で、客觀詩主觀詩といふのも畢竟こゝからわかれて來るのである。

三、客觀詩

といふのは、人事と謂はず、自然の景致といはず、凡べてわが美感に觸れたものを、其まゝ描き出すのを主眼とするもので、自分以外の物象の美を、主に寫しだすものであるから、夫れに附きまゝとふた自分の情の方は先づ第二の位置におかねばならぬ。例へていへば

田子の浦のうちいで、見れば白妙の富士の高根に雪はふりつゝ、

村雨の露もまたひぬまきの葉に霧立ちのぼる秋の夕ぐれ

といふ歌も、又は

千里鶯啼綠映紅、水村山郭酒旗風

といふのも又は

菜の花や月は東に日は西に



といふのもみな、これ客観の詩である。どれもこれも主に詩人が感想に寫た外物の美しい象で、田子の浦にうちいでた當時、富嶽の壯景を舒し、秋の夕ぐれに村雨の晴れた景致を描き、水村山郭の春景をうたひ、菜の花の咲く廣野の夕暮を捉へ來るなどは、要するに景を先にして情を後にしたものだといはねばならぬ。また此外にも人事を舒したのものもあるが、それは別に例を示すまでもない事で、客観詩にはたゞ舒景と舒事の二つがあると思へばよいのである。

#### 四、主観詩

主観詩といふものは前にもいつた舒情詩とひとしいもので、客観詩とは殆ど正反對である。夫れは自分以外の物象の美よりも、夫れに依て起る自分の情を主とするので、事物景致を美化して寫し出すよりも、自己の詠歎を表示するのが其本色であるのである。これには殆ど自己の心情のみをうたひ出したもの、夫れは純舒情詩とも稱せらるべきものである。例へば

思ふには忍ぶる事のまけにける逢ふにしかへばさもあらはあれ  
おもふこと云はぬやうなる海鼠かな

の類、又は情景混融して

津の國の浪花の春は夢なれや蘆の枯葉に風わたるなり

半夜燈前十年事、一時和雨到心頭



ゆく春を重たき琵琶の抱きどころ

といふ類、いづれも抒情詩である。どれもこれも事物景致の象を後にして、詩人が心裏から滾々として湧き出た美しい情を先にして居るからである。併し詩には客観なら客観、主観なら主観とさつぱり岐れてうたひ出されるといふものではない。大抵主観客観兼ね具へたものが多いので、抒事的抒情詩もあれば、抒景的抒情詩もある。けれども總じて詩の發達といふものは國の東西を論せず皆抒情詩から起てゆくのあたりまで、殊に東洋の詩乃ち日本でも支那でも情をすゝめて景を付けるといふ風が重んぜられ、餘韻嫺々といふのが其特色のやうにも思はれるのである。

## 五、人間の慰藉

既に詩の意義でも解説して、わが國歌の上に就ても概略説明を及ぼして置いたから、其如何なるものなるかの問題に關しては、最早懸念する事もなからうと信ずる。そこでこゝには詩の價值といふ事を尤も簡單に述べておかうと思ふ。

實に詩は雄大な自然と一致聯合した同情性の美しい情であるから、人間最後の琴線に觸れた響とでもいはねばなるまい。されば其間には些の偽善をも許さない、寸毫の虚飾をも許さない。まことに高い清い想で、俗界の凡塵に疲勞した人間には此上もない慰藉となり、福音となり、興奮劑となるのである。況んや美を愛でるといふ事が人の自然にもとづいた天性であるならば、其美に根ざしの深い詩が人間最上の慰藉でなくてはなるまい。素より文學を好むのが人の通有性であると論定した上には、其純美を盡くされた詩を解するといふ事も、また從て必用な事物になつてくる。詩の解されぬ様



の者は花咲かぬ境、鳥啼かぬ邊あたを吟行するに比ひしいので、いはゞ沙漠の旅行者といつてもよいのである。其寂寥の感と、無趣味な生活は、一望たゞ砂礫を以て充みされた千里の沙漠を横斷するにひとしくはあるまいか。

## 六、我が國の歌

もう斯かうなれば我が國の歌乃ち國詩を知らぬといふ事が、甚だ不幸な事になつてくる。まして其發達も變遷も知らぬといふのは文學に志こころざすものの不名譽である、そこで我が歌の發達變遷は完全な文學史に譲る事として、こゝにはたゞ歌壇の衰頽に就て一言しておかう。



## 七、歌壇の衰頹

近代の文學に於て歌壇の衰頹を抱いたといふものは第一天才を得なかつたといふ事が重要な原因らしい。殊に古人の糟粕を捏ね返して想の上に心をとめなかつたといふのが、多くの病疾に相違ないのであつた。修辭の上に新らしい研究もせず、着想の上にも深い考へをも持たないで、たゞ舊態を持續したといふのが近代歌人の文學史上に遺した事柄で、此失敗を救ふとした天才の無かつたのは更に又嗟嘆すべき事ではある。たとへ景樹一派の桂園口調が一寸眼新らしい歴史を綴り得たにしろ、それも淺薄な歌ぶりで一向醇美の詩境に達し得られなければ、熱情の乏しい事に於ては、寧ろ特色であるかとも思はれる位である。詩人として尤も喜ぶべき狂熱を認める事が出来ないのは由來頭腦のない我が國人にとつては無理もない事ではあるけれども、わが歌壇にとつては蓋し不名譽千萬な事ではあるまいか。かくて殺風景な歌ぶりは永い間歴史を汚

して來たが、新思潮の刺戟から、詩といふ事に就ての確かな觀念も、歌人等の頭腦に出來てくる様になつて、所謂新派の勃興となつた、これに依て和歌壇の革命は始められたのである。此よろこぶべき革命の有様は、わが尤も讀者に對して記憶して貰いたしと思ふ事なのである。



## 八、新派の起原（和歌壇の革命）

國詩界の作物なり批評なりが、色々新しい傾向に赴いて來たが、その新しい傾向の動機を作つたのは己れであると云つて、自分免許のことを言つて、近頃少し學問をした（近々五年以上の過去の歴史を知らない）少年の學生などに空威張をして居る人がある、その天狗の隊長は正岡子規と云ふ人である、明治になつて國詩の革新と云ふことを實行し始めたのは己れだと云ふことを其門生から屢々世間に向て吹聴して居る、それも子規君が今詠んで居る擬古的の歌のやうなものを發明したと云ふのならば、それは如何にも子規君の發明であるかも知らないが、國詩革新と云ふことを——從來の國詩に甘んじない、明治には明治に適當した國詩があるべきであると云ふ意見の發表ならば、斷じて子規君が其第一の聲を揚げた人とは云はれない。

今から見れば格別珍しい意見でも無かつたが、既に明治二十年頃萩野由之君が「和歌改良論」と云ふ一冊子を公にせられた、これはマダ時勢が早くて頓と世人の注意を惹かずに仕舞つた、夫から二十三年頃「國民の友」の上などで此春死なれた池袋清風先生、それから井上通泰先生と云ふやうな人が香川景樹の研究を公にして、其中に當時流行の陳腐な國詩を罵つて居つたと思ふ、又當時に於て國文の改良に熱心な新進の文士で、終に國文の改良を成功した僕の師の落合直文先生などは、其友人、其門生の爲に國詩の改良は是非必要であると云ふことを言はれて居つた、又丁度其頃であつたが佐々木信綱君は其父君と共に歌學全書の校訂に従事して、國詩の改良を圖るには第一日本人に「日本にはどう云ふ詩があるか」と云ふことを知らせる必要があると云ふ考であつたらしい、現に其父君などは長歌改良論と云ふものを公にして、其當時海上胤平翁など、激しい議論をせられたやうであつた、此處で僕自身のことを言ふのは誠に不遜であるが、僕は當時田舎に居つて明治の國文は落合小中村などの先輩に依つて着々と改良せられて居る、けれども國詩は依然として眞淵派、景樹派の單調な、無



趣味な、淺薄な、陳腐なことを繰返して居るのを見て、此國詩も亦是非改良せねばならんものだとして子供心ながら考へた、デ當時から僕の詩は自我の上に立つて成るべく人眞似と云ふことを避けるやうに務めて居つた、それから東京へ上つて落合先生の世話になつて、先生の國詩に對する意見を口づから聽くことを得たが、先生の意見も亦眞淵や景樹が貴いやうでは立派な歌は詠めぬ、落合は落合、與謝野は與謝野の詩でなくつては眞正の自分の作物とは云はれないと云ふことを常に聽かされた、それが其當時の先生の著はされた『新撰歌典』の序文を見ると明白に解つて居る、今は朝鮮に渡つて或る事業に熱心して居る爲めに文壇に其の名が聞えないけれども、先生の舍弟に槐園と云ふ人があつて、其人は先生より一層激しき國詩革新論であつて、其極端な意見を持つて居ることが誠に能く僕と意見が投合した、何でも二十五年の秋であつたと思ふ、二人が先生に勧め淺香社と云ふ國詩研究の團體を作つて、其頃の同志を集めて毎土曜日に歌の會を開いて、議論もし歌も詠み、誰が師匠と云ふこともなく、誰が弟子

と云ふこともなく、互に信ずる所を語り合つて随分激しい議論などもあつた、僕と槐園が海上翁を尋ねて屢々翁と激烈な歌論をしたのも其頃であつた、當時の僕等の歌や歌論は鷗外先生の『しがらみ草紙』に載せたり、日本新聞に載せたと思ふ、デ其時代は言はず語らず多少の見識を有して居る學者や歌人が、國詩は革新せねばならんと云ふことを念頭にして居つたらしい、で革新の氣運は慥かに明治二十三四年頃から動き出したと信ずる、其時代の子規君は俳句の革新に熱心であつて、和歌のことはまだ極く初歩の人であつた、二十六年の夏、僕と槐園が松島見物に往つた時に、子規君もあの地方に遊んで居つて槐園と子規君とが出會つたことがある、其時に槐園から國詩の革新せねばならんことを色々子規君に話した所が、子規君の曰くに、至極御同感であるが、僕はまだ和歌のことは研究しないから和歌の標準と云ふものは頭から解つて居らぬ、けれども此頃は古今集が面白いと思つて居ると云ふ話であつた、「古今集が面白いやうでは俳句には明るい人であらうけれど和歌はまだ如何にも初心である」と評



した位のことである、同じ二十六年の十一月に僕は秋山定輔氏と二六新報の編輯に従事したが落合先生始め僕等の歌は屢々二六新報に載せた、翌年の春であると思ふが、僕が『亡國の音』と云ふものを二六新報に書いた、高崎正風、小出榮など云ふ宮内省の歌人達を攻撃して、其歌を擧げて、今から見れば随分亂暴な批難を下した、是は落合先生とも槐園とも合意の上の議論であつて、僕等淺香社の者が正面から舊派歌人を罵つた第一の聲であつたと思ふ、随分蕪雜な議論であつたが、舊派歌人の單調に飽いて居つた當時であつたから多少世人の注意を惹いたらしかつた、當時に於て日本新聞と小日本新聞との記者であつた子規君は、頗る僕に同情を寄せられて、小日本新聞の紙上で「老耄れた宗匠連は敵手あつてにしても駄目だ、それよりも教育のある青年に對つて革新的の和歌を鼓吹したら宜かろう」と云ふやうな注意を書かれた、この頃金子元臣君なども僕の師と別に和歌會を設け「歌學」と云ふ雜誌までも出して、和歌改良と云ふことに期せずして同論であつた、其時分に僕等は先輩である今の佐々木君の歌が大

嫌ひで（比較的他の宗匠歌人とは異つて居るけれども）いつも寄ると佐々木君の歌を批難して居つたが、同君も年は若し、僕等と違つて國語の素養も十分にある先輩だから、必ず翻然として今の調子を改められる時節が來るであらうと望みを屬して居つた、佐々木君に聽いて見ると、國歌革新の意見とも云ふべきものは父君と共に二十三年の頃から有つて居つたが、自分の作物が「是では往けない」と氣が付いたのは、恰も僕等が騒ぎ出した二十五六年の頃であつたらしい。

それから二十九年の夏に僕は朝鮮から歸つて來て、初めて僕の詩集『東西南北』や『天地玄黃』を公にした、其作物は今から見れば誠に厭味な、沒趣味な、作物が多くつて自分で見るのも氣耻しい次第であるが、其當時は少年の客氣で非常な自負であつた、卷頭の自序に「小生の詩は小生の詩に御座候、古人をも何人をも模倣したものでない」と云ふやうなことを公言した、其時は佐々木君などの歌の調子が大に一變せんとして居つて、末頼もしい人のやうに思つたから『東西南北』には君の題歌を請うて載せた、



それから子規君も俳句の議論をする程の人だから、國詩の革新も同意であらうと思つて、『東西南北』の序文を需めたが、其序文に由て見ると子規君も「どうか和歌なり新體詩なりの革新をやつて見たい」と云ふ意見が顯はれて居る、「己れは後から出掛けるから君は先づやつて呉れ給へ」と云ふやうな書振である、此僕の悪作は如何にも世人の注意を惹いて、攻撃やら賞讃やら、非常に盛な批評が四方に起つた、それは「東西南北」と『天地玄黄』に附けてある當時の批評文を見ると能く御解りになる、僕は自分の作を歓迎して貰つたことが嬉しい許りでない、國詩を革命する一大氣運は勿論世の中に十分に熟して居るが、偶々微力な僕の如き者が飛んで出て其火の手を上げ、其火蓋を切つたと云ふだけのこと、之が爲めに一般の讀書をした人々に、從來の國詩に甘んじないと云ふ意見が充ち満ちて居ることを確め得たと思つて、頗る嬉しく思つた、が退いて考へると僕の作も落合先生の作も佐々木君の作もまだ幼稚なものであつて、迎も議論の十分の一だも實行しては居らぬと思はれたから、此氣運に乗じて

國詩を革新するには僕等の如き素養の淺いものでは迎も覺束ないことだ、是非一大天才が現はれて之を大成して呉れねばならないと思つた、勿論當時の僕は別に目的とする事業もあつたから、道樂でやつて居るので、歌で世に立つ考もなく、國詩を革新したからと云つて、それを名譽に思ふ僕でもないから、子規君などに向いても又他の友人に向いても、僕は専門歌人でないと云ふことをいつも公言して居つた、それを今日でも一部の人々は何か僕が弟子でも取りたい、歌で生活でもしたいと云ふ野心があつて高慢なことを言うて居るやうに誤解して居る人もあるが、僕は元來好きでやるので、國詩を革新して虚名を得やうの、宗匠と言はれやうの、人を後輩と呼びたいのと云うやうな、劣等な腐れ根性は有つて居ないのである、けれども御尋があつて見れば明治の國詩を革新し始めたのは斷じて子規君ではないと云ふことを明言する、前に話した萩野、池邊、井上（此人は今では老耄れてしまつて矢張り舊派歌人の一人になつて居るけれど）の三君、落合先生、佐々木君などが早くから考へられて居つたことであると



思ふ、又槐園君、金子元臣君などの功勞も決して没すべきとでないと思ふ、事實上子規君が國詩の爲に自分の意見を公にせられたのはズツト後の話で、漸く明治三十年の夏に日本新聞で『八たび歌人に與ふるの書』を書き『百中十首』と云ふ自分の作を公にしたのが子規君の社會に向つて和歌に對する發聲の初めであつた、三十年の冬になつて僕と同門の久保猪之吉君、服部躬治君などが、大學の學生と一所に『雷會』と云ふものを起して、是も他の方面から熱心に國詩の革新を花々しく讀賣新聞などで絶叫したのである、『雷會』に次で『若菜會』とか何會とか色々な會も起つたが、それは皆此兩三年の出來事である、二十五年以來は落合先生も就職の傍らに其作歌を公にせられ、佐々木君の歌も二十八年頃から調子が一變して、此二家とも絶えず國詩革新の爲に盡力して居られた、僕の如きも朝鮮などへ往つて種々の事業に従事して居る傍に、道樂は止められないもので、閑を偷んでは歌を詠んで友人にも示し、世の中にも公にして居つた、決して子規君一人が國詩革新の爲に盡力せられたと云ふ譯ではない。所

が誰言ふとなく革新的の國詩を作る人を總稱して新派と云ふ名稱を作り出した、子規君などは新派と云ふものを自分一人のものゝやうに考へて居らるるけれど、世間から新派と云ふのは、其間に色々の種類はあつても、兎に角革新の意見を有つて居る歌人を新派と呼んで居るのである、今の正岡君等の一派が考へて居らるるやうな窮屈なものであるならば、新派と云ふ名稱は誠に國詩の爲に不吉な惡稱であつて、さう云ふ名稱は何時でも熨斗を付けて讓つて仕舞ひたい、が社會には眼がある、決して正岡君許りを新派とは言はさないであらう。

右の一項のみは明治三十三年の夏、聊か激する處ありて某雜誌の爲めに談話したる速記なり。中に子規君に對して頗る不遜の言語あるは、當時某氏なる人あり、漫りに子規君の説を誤り傳へて、われをして子規君を誤解せしむるに至れる結果にして、こは某氏の明かに子規君二人に謝したる所、われもまた子規君に會して某氏の漫言を輕信したるを云ひ、この談話中の不遜の言語をも陳謝し、二人一笑して別れたる所なり。しかも此に之を掲げたるは一は便宜上新たに稿を起すを避けたるにも由れど新詩創立の際如此き行きちがひも有りしことを傳へむは、後の人の参考ともなるべしと思へば也。之に由て再び世の誤解を招かざらむことを注意す。



九、新詩形

人は余等が作る長き歌のみを新體詩と稱して短き歌は從來の和歌と同じやうに思へり。されば從來の和歌を讀みたる眼にて余等の短詩を評し、或は奇を銜ふと云ひ或は趣味なしと云ひ、調子が流暢ならずと云ひ意味が晦澁なり分らぬ歌なりと云ふ。その様な評をする人には余等が詩の分るべき理由なし、分らぬが尤もなり。余等の詩を讀み且つ評せむとする人々に告ぐ。諸君先づ思へ、余等が詩長さも短さも共に新體の詩なり。内容は姑く云はざるも、その形式に新語多く新語脈多く、新修辭多し。

そや理想こや運命のわかれ路に白きすみれをあはれと泣く身  
親はありさむかしひとりの親はありさ百合の園生にふとはぐれたり  
うしろよりさぬきさせまつる春の宵そぞろや髪のみだれて落ちぬ

花は黄に草はみどりにふと見れば我はましろき翅のなかに (以上磯幹)

春よ老いな藤によりたる夜の舞殿ならぶ子らよ東の間老いな  
ほととぎす嵯峨へは一里京へ三里水の清瀧夜の明けやすき  
とき髪を若枝にからむ風の西よ二尺に足らぬうつくしき虹  
鶯に朝寒からぬ京の山おち椿ふむ人むつまじき  
おはしまのその片袖ぞおもかりし鞍馬を西へ流れにし霞 (以上晶子作)

これらの諸作を調べて見給へ、如何にも從來の和歌ばかり見慣れたる人の目には奇怪なる感も起るべけれど、そは第一に内容が違ひ、第二に從來の和歌に無き新語、新語脈、新修辭法を用ゐたるが故に分らぬなり。

上に擧げたる歌の二三を講ずべし。  
そや理想こや運命の別れ路に白きすみれをあはれと泣く身  
おのが志す所とは反對な方面へ、心ならずも身を任せて行く人の恨を述べたる作なり、



假りに此に文學に熱心なる少年がありとして、一生を文學の研究に盡さむと願へども、父母の意見や一家の事情やは、少年をして他の生活に利ある學業を修めしめむとす。少年はその理想を打捨て、已むなくも人生の運命が指揮のまゝに、尤も忌み嫌へる學術の方向に轉せざるを得ず、その氣高き文學の嗜好を有しながら、淋しき生涯を送らねば成らぬ身が、恰も天上の香ひを持ちながら人にめでらるゝ色もなき白すみれの、淋しげな花に似てはゐるか。その文學は理想なり、その淋しき生涯は運命なり、理想に別れて運命に従ふ二つの道の別れ目に立ちて、白すみれも亦わが今の境遇に似たる花かと、花を悲み我を歎いてをる少年の心事を叙したるものと見るべし。

親はありきむかし一人の親はありき百合の園生にふとはぐれたり

これもまた理想を抛ちて、現實界の運命に身を委ねたる人の述懐なり。我とても今こそは此いやしき職業に身を委ねて、世の競争に苦戦して何の慰藉もなき心の淋しさは、恰も人間の中の一人孤兒ひとりごの如くなれども、往時を追想すれば、温き慈愛の手に我を引

きて、幸福なる百合の花の咲るが如き樂園を逍遙し給ひし御親ありき、まことに忘れがたき一人の御親ありき。然れども其御親と計らずも道をはぐれて、今は斯かる頼る蔭もなき孤兒の薄命をかこつ我なり。

御親とは理想を喩へて云へり。前の歌の少年の譬へで云へば、文學者にならむとせし頃は、文學その者が恰も慈愛なる親の如く、我を導き我を慰めて、その樂しき心の状態は、宛ら百合の花さく天上の樂園に在る心地なりしに、一旦文學と別れて無味乾燥なる職業に従事してよりは、何の慰藉もなき淋しの孤兒同様なりとの意に見るべし。

花は黄に草はみどりにふと見れば我は眞白き翅のなかに

詩人や畫家が美の感興にふれて、恍惚として我を忘れたる時の『幻覺』を歌へり。東洋の套語にて云へば、羽化登仙の想ありとでも云ふべき境地なり。いつのまにか花の黄なる、草の緑なる美しき御園に來れるよと見て、ふと願ればこれは驚くまい事か我身もまたいつしか眞白き大なる翅につゝまれて、遊化自在なる天上の人と成りすませ



り。

春よ老いな藤によりたる夜の舞殿ならぶ子らよ東の間老いな

藤さく舞殿の春の宵にまばゆいやうな舞姫や伶人を打見て興じたる歌、春も老い易い、人も老い易い、今宵の春も老ゆるな、美しき人達も老ゆるな。人生の歡樂能く幾時ぞ、この春を唯だ面白く騒げ、空しく東の間に老いて了ふな、となり。

この詩の調子、特に華美やかなる鼓拍子の如く、讀者の感情を昂進發揚せしめて、能く内容の境致と一致せり。

とき髪を若枝にからむ風の西よ二尺に足らぬうつくしき虹

叙景の歌なり。底きよき溪の流に洗ひ終りし我が下げ髪をかたへの若き緑枝にからむ涼風のいたづら、と見る髪のなびきの西に、枝と枝との間より二尺にも足らぬ小さき遠虹の美しさ。『とき髪』に美しき洗ひ髪の少女を想はせ『若枝』に緑にこもる夏の木蔭を想はせ、『風の西』の警句に其方になびく丈の黒髪をしのばしむ。更に小さき虹を

添へて一幅の光景まばゆき心地す。

鶯に朝寒からぬ京の山おち椿おむ人むつまじき

また叙景の歌なり。鶯なき朝起のひがし山、こゝちよき朝逍遙の樂しさ何にたとへむ。鉾かけ松かげの曲りく道、苔滑らかに赤白の椿おちて、わかき男君女君ふたりその後ろ姿ゆかしく、むつまじき私語には鶯も負けぬ氣になるべし。

以上の歌を仔細に玩味し研究し給へ、如此き内容と如此き修辭法とは、從來の和歌の何れに基因して起るべきか。余は斷じて之を以て明治の新體詩の一種とし、從來の萬葉集古今集の如き短詩を祖述したるものにあらずと云ふ。固より偶然にして此種類の短詩の創製せらるべきにあらねば、初めは從來の短詩を革新せむとして、三十一字の短詩の形を土臺として起りたるに相違なきも、今日になりては、西詩の語脈、漢詩の語脈、俳句の語脈、その他口語の語脈等を融合して一新詩形を作れるものにて、之を從來の「秋の田のかりほの庵のときを荒みわが衣手は露にぬれつつしの短詩に比して、



同一系の詩なりとは云ふべからず。更に之等の内容を檢する時は、從來の歌の春の野には必ず雲雀なき、秋の山には必ず鹿を見るの類と同視すべからず。叙景敘情ともに複雑にして、彼從來の露、雲雀、螢、水鶏、初戀、別戀等の單純なる材料を盛るに、千篇一律なる「秋は來にけり」調を以てしたるが如き類にあらざる也。

歌を以て權兵衛にも太郎作にも作れるものの如く思惟して、世に歌の教師の「宗匠」と云ふ者あり、插花、茶の湯、遊藝の師匠の如く、之を一般の何人にも教授するが故に、世人もまた歌を蔑視して、千早振とか足曳のとか短冊に書けば、それで歌に成り居ると思惟せり。日本の詩が數十世紀の間に何等の進歩を無かりしは、歌を斯く容易に作り得る物と誤解せしに由ること多し。如何にもまた從來の短歌の如き者が「詩」として價值ある者ならば、日本の詩は何人にも作り得るなり。毫も獨創の思想なくして、唯だ古人の口眞似のみをせしが從來の短歌にして、景樹の蘆庵のと云へども、孰れも古歌の假聲かこゑづかひに過ぎざりしのみ。今や國詩革新の實稍舉りて、長詩には藤村、泣

董、有明、白星、林外の如き作家を出したると共に、余等の短詩もまた、幸に古人の跡を襲はず、ユガミなりにも「詩」らしき者と成れるにや。最早如此き短詩は何人にも作り得べきにあらず、詩人の素質ある人にあざれば作り難きものと成れるが如し。詩人の素質なき人が漫りに詩を作らむとするは、勞して益なき事なり。余は今後の短歌を撰拔し、時々國詩に對する意見を讀者諸君に公にするに當り、豫じめ諸君に注意し置くは「詩才なき者は詩を作る勿れ」の一語なり。今日以後の詩は決して左様に容易なる製作物にあらずと知るべし。



## 十、新詩評釋

『明星』の短歌と云へば、わが新詩社の同人なり又は自分なりの作物に就て是非を下す事になる。これは頗る自負の嫌があるけれど、聊か自分等の主張と趣味と、現今の傾向と、創作の上にある夫れ相應の用意とを述べる事は、刻下の必要事件であらうと思ふ。

くれなゐのさては緑の黄朽葉のつひに真白の我なり世なり (碎雨作)

或る主觀を具象的に現はさうと云ふ傾向の中でも、これは近頃尤も新しい作風の一つ。色彩を假つて來て自己の運命を叙したのがこの歌。くれなゐは派手に艶な色、緑は深遠で濃重な色、ここまでは希望もあり活氣もあり榮えも有つたやうだけれど、黄朽葉から終に真白に至ては、心細い、さびしい、光も色も無い我が一生の運命であると云ふので、我國では例の無い詩體である。

語を此やうに疊ねるのは短歌には新しい修辭で、之に似た詩形は、余のにも『紫のあ

けの萌黄のみづ色の絲はさまさま花は真白き』と云ふのがある。余のは花と絲とを假つて詩人の戀に比したので、同じ意味ではあるけれど晶子の『戀と云はじそのまほろしのあまさ夢詩人もありき繪だくみもありき』と云ふ歌は正面から叙してある。

椿それも梅もさなりき白かりきわが罪問はぬ色桃に見る (晶子作)

歌にきけな誰れ野の花に紅き否むおもむきあるかな春罪もつ子 (同)

二首ながら先づ句法が斬新である。

色彩を假つて來たのは前の碎雨の作に似てゐるが、戀愛に比したのであるから濃艶な歌である。

前のは、桃花の紅きを戀に酔へる人の子の我れに比して、椿や梅の高潔な色は終に我に比すべきで無いと自らを卑うした作であるが、後のは頗る大膽な作で、宜しく之を詩人に聽きたまへ、誰か野の花の紅きを喜ばすと云ふや。われはこの趣ある春の懊惱



を棄つる能はずと云ふので、この紅き花は同じく戀愛に比してある。罪と云ふ一語を戀の悶えに代へた修辭が殊に奇警だ。

余の作にまた「ゑんじ色に人は袂を染めなれてまだしと云ひぬわが濃紫」とあるのも色彩を以て戀愛に比したので、ゑんじ色の深酷なものと濃紫の濃艶なとを反映して、彼我の情味の輕重を區別したまでの歌。

おなじ晶子の作に、この類の色彩を比喻に用ゐたものが多いやう。「乳房おさへ神秘のとばりそとけりぬこなる花のくれなるぞ濃き」また「かくてなほあくがれますか眞善美わが手の花はくれなるよ君」また「忘れがたきとのみに趣味をみとめませ説かじ紫その秋の花」など。これらの些末な事すら我國の詩には空前の發明である。

よそはひし京の子すゑて絹のべて繪の具とく夜を春の雨ふる (晶子作)  
京の宿りに、まばゆいやうな京の舞姫をモデルに居ならばせて、繪筆をとると云ふことが、能く春の夜の雨に適してゐる。畫家もまた美しい青年畫家であるやうに想はれ

る。「よそはひし京の子」と云ふ措辭が巧いので厭味にならぬ。若しも「うつくしき舞姫すゑて」など云へば厭味である。

『京の子』と云うて京の舞姫にきかせたのは、余の作に『京の子は舞のころもを我にさせぬ北山おろし雪になる朝』また晶子の作に「いもうとの琴には惜しきおぼる夜よ京の子こひし鼓のひと手」などもあるやう。

おぼしまのその片袖をおもかりし鞍馬を西へ流れにし霞 (晶子作)

鞍馬を西へ嗟嘆あたりへかけてなびいた霞に、京の山の春の朝が能く描寫されてゐる。おぼしまにかけた片袖は女性だけに細かな動作に氣がついてゐて、欄頭の人の猶他の一人までが目に見えるやう。「おもかりし」の一句に、別れ難い立ち憂い感情なり態度なりを云ひ現したのは巧みだと思ふ。

裾さえて葦の真中に立つと見ぬ天の香をもつ小百合の花の (とみ子作)

理想界の自己を大膽に歌つたもの。もすそがおぼるに消えて、百合の花の葦のなかに



立つた女神ぢよしんのけだかさ、うつくしさ。一句々々措辭が奇警であるので、從來の國詩ばかりを見なれてゐた人を驚かすには最も恰好の歌である。「の」どめは古人にも稀に有つたけれど、兎角わざとらしくつたのが、この作に至て初めて成功した。一二三の句の勁健な爲めに四五の句が能く落ちつくのであらう。

この歌と前後して幻影、神などを歌ふことが同人の中に流行してゐる。通治氏の「打沈みゆく子のすがた何やらの神とも見えて秋の日黄なり」余の「わが見たる秋の御神は男神なり紅葉かざしてちさき太刀はく」また「木がらしに笛ふく神の御子たり鶯の紅葉をたぐりて消えぬ」また「人ふたり真白き翼生ふと見し百合の園生の夢なつかしさ」などが始めで、晶子の「今は行かむさらばと云ひし夜の神の御裾さはりてわが髪ぬれぬ」又「紫にもみうらにはふ亂れ箱をかくしわづらふ宵の春の神」碎雨の「ちさき神もみぢに泣きしあしたより冬のみくるま鞭加りぬ」又「あかつきは早まもあらぬ星かげにおく霜まもる神のみ姿」又「ふと見えて消えしは神か水色のみけしさながら夜は

明けにけり」蝶郎の「ほそきくさは云へつよき御こゑなり董さく野にこたへます神」又「何となく戸を出でて見しは夢なりき廣きみそらのみくるまの音」通治氏の「眺めをればいつしか五つはた七つ八つともなりしひと花水仙」また「黄の蓋をましろに包む水仙のふとあらはれて闇にきえたる」止水の「髪切るとむかひし鏡わがほかの姿うつると見れば消えたり」余の「美しと御手なる絲の紅き白きながめてしばし結びまさぬ神」また「花は黄に草はみどりにふと見れば我は真白きつばさのなかに」また「笛吹くに吹くにいつしか百合多きこの國さては海いくつ越えし」など、色々と變化した作が出来来るやうに成つた。

わかき子のとくも老いたる怨みにとゑにし神のみやしるこぼたむ (通治作)  
殆ど一年前の作であるから、作者の進境から見て、作者自身には最早得意の作で無いかも知らぬ。

この詩を讀むと、失戀が人の一生を誤らしめ、數奇落魄の地に窮死せしむると云ふ幾



多の實例が聯想されて、誠に悲しい心持になる。  
 白髪三千丈と云ふのは大袈裟であるが、愁ひの爲めに早く年がよると云ふのは能くある事で、花の如き青春時代を匆々として老い去るのは一生の恨事である。「ゑにし神の御社こぼたむ」と云ふ激語も面白いが、「わかき子のとくも老いたる」と云ふ句が、誠に多恨な句である。

ゑにし神の歌は、この作者の「心ある魂はよりこよ戀の神ゑにし神のやはらぎはからむ」又「戀の神とがゆるしませみいものゑにし神のいます國なき」又「くれなゐの繩もつ神よとこしへに君すむかどはうかがひますな」余の「世の常のをしりもつ子に今日なりぬゑにし神の袖うらみあり」また「うつくしと御手なる絲の紅き白き眺めてしばし結びまさぬ神」などもあるが、大抵の人の作が厭味に成つて居るのは、縁むすびと云ふことに俗意があるからであらう。

その人にうれひむゑにしおへるべしただかりそめや上田のひと夜

(通治作)

調子が第一に人を滅入らせるやう。おなじ人の「つみし草に誰が名おはせむ佐久の夕千くまの川の北に流るる」も能く似た調子。

作者がその上田の地で或る感興にふれた作であらうから多く特度は出來ないが、ただこよひ一夜の歡會は誠に慌ただしい呆氣ない事だ。さりとして旅に棄て行くなさけの明日は路上の人と云ふ輕薄なものでは無い、必ずその人に愛ひを共にすべきゑにしは持つて居るのであらう。それにしては餘りに呆氣ない別れである。遭逢の難きは人生の常と云へ、適ま情人と手を取つて夢の如き一夜の歡語に、倉皇として忽ちに離歌を唱へねばならぬ遊子の身の薄倖は、何人も同情の涙を禁じ得ない所である。

序だから別れの歌の少し異つたのを擧げやう。晶子の「云はずさかずただうなづきて別れけりその日は六日二人と一人」は慰める詞もないやうな悲しい別れで、二人と一人が珍しい。同じ人の「ひと枝の野の梅をらば足りぬべしただかりそめのかりそめの別れ」は一寸の別れである、すぐに逢はれるのであるから泣く程のことでない、野の



梅を折つて襟にでもさして送ればよい程の別れ、別れと云へば必ず泣くものゝやうに成つてゐるのに、さう云ふ所をつかまへたのが亦面白い。同じ人の『あすを思ひあすの今おもひ宿の戸による子やよわき梅暮れそめぬ』は明日の別れを想ひやつたので、契沖の『なるるもつらし明日のふるさと』などの技巧の跡の見える俗句と同一にはならぬ。余の『清き乳や兒のいさましき朝なきやさ云へさびしき別れの車』は兒をつれて朝立つ人との別れ。また『たどるべき明日もたぬ子に人ねたし紀伊の名所を語りてすぎぬ』は、一夜大阪の宿で紀州の桂舟に紀伊の名所自慢を聞かされて別れた時の作。

そは夢かあらずまぼろし目を閉ぢて色うつくしき靄にまかれぬ (とみ子作)

戀に酔つてゐるころもちを、美しい靄と云うたのは清新である。この『まぼろし』は夢幻と對して云ふ時のまぼろし。同じ人の歌に『何と云ふ處か知らず思ひ入れば君に逢ふ道うつくしきかな』とあるも同じ着想であるが、うつくしき靄の方の印象が、

やはらかに人を感せしめる。

通治氏の『しかはあれ天ゆさびしてすすめまつるかしこに野あり道うつくしき』と云ふのは理想界をさしたので、戀愛では無い。

わがこころそぞろ碎けて流れいでてうす紫や春の野の水 (蝶郎作)

春の水を詩化したので、このやうな種類のもは我國に例が無い。

温かな、うら若い、ゆるやかな春の野川の水と、恍惚として野にある我的心とが同化したやうのこころ。

うす紫と云ふ所に春の思が能く現れてゐるし、そぞろ碎けて流れいでると云ふ諧調に富んでゐる修辭に、恍惚たる同化の感情が甘く盡されてゐる。作者の初めの作は『こころ、胸、眉、頬、唇おぼろく碎けしと見る春の野の水』と云ふので措辭が新しいと云へば云ふものの、實は生硬で、解剖學の講義でも聽くやう、切角の着想が沒趣味に成つてゐたのを再考の末に斯う改めたので、渾然たる佳作に成つた。何人もどうか遺放



しの作り方をせず、十分に措辭の彫琢を試みて欲しい。

春の水を詠み込んだ歌で同人の佳作を挙げると、晶子の「繪日傘をかなたの岸の草になげ渡る小川よ春の水ぬるさ」また「柳あをき堤にいつか立つやわれ水はさばかり流とからず」また「みな底にけふる黒髪ぬしや誰れ緋鯉のせなに梅の花ちる」また「枝折戸あり紅梅さけり水ゆけり立つ子われより笑み美しき」碎雨の「ゆるぎゆくみの影のこむらさき緑さすよと見れば消ぬたり」また「人かあらずただ慕しの春の水おりし胡蝶のけさねたましき」また「つみてこし川上遠くみかへりてふたり指さす春の山うすき」蝶郎の「ただやるは惜しくさびしと芹あらふ流はるかに君のかた見る」など。

いひさしておもてもあげず頬をそめしその子よしある十七の春 (蝶郎作)

初戀、濃艶な題目。しかし今日では厭味な句である。「その子よしある」と作者がその故よしのある事を判然と云はないで、讀者に想像させる所が面白いやうで、實は輕佻で厭味である。十七の春などと年を短歌に叙するのは、去年の秋からの流行である。

余の「戀と名と何れおもきをまよひ初めぬ我年ここに二十八の秋」また「子らつれて岡崎去ると日記にありわれよその春七つのわらは」また「四十九のけふよりさてはおそから夕の鐘はいくつ撞くもの」晶子の「人とわれおなじ十九のおもかけをうつしし水よ石津川の流れ」また「その子はたち櫛に流る、黒髪のおどりの春のうつくしかな」また「ゆあみする泉の底のさゆり花はたちの夏をうつくしと見ぬ」など。

わがためのしばしを人のなげ島田この手鑿の手ことさらあぢ (碎雨作)

新詩社の同人が去年の夏までは「妹」と云ふ古語を棄てかねてゐたが、次には「君」と改つて、今では夫も陳腐に成つて、専ら「人」と云ふことが行れてゐる。ここの「人は即ちその情人のことである。

情人を暫くと云ふので、モデルに立つて貰つたのだが、當人は嬉しいやら羞しいやら氣が氣でない、覺えず鑿もつ手が常に似せわしいと云ふ趣向。極あどけない初戀時代の歌。投げ島田の意氣なのを挿んで印象を明にした爲めに、「ことさらあらし」と。



云ふ抽象的の句が活々してゐる。斯う云ふ斬新な材を捉へて輕佻にならなかつたのは、全く一二三の句に説明的の動詞を省いた修辭の功である。

作者が美術學校に學んで居る人だけに、殊更この作が面白いやうに感じられる。

藝術家の上を歌に入れることは、ぼつ／＼見かける所であるが、この歌と、通治氏の『さばかりも紅き繪の具をたたへつる繪師の若さに酒を強ひばや』また前に擧げた晶子の『よそほひし京の子すゑて』また『ひと年をこの子がすがた絹に成らず繪の筆すてて詩にかへし君』とみ子の『歌と書と一つの絹に許されて二人つみたる草ならば君』また『よべも見しそのうつくしき夢のぬし畫絹の半われにかしませ』などは目立つ作である。

野がへりの與作のかけのさびしきにえもなぐさめぬ五作を見たり (梟庵作)

田園の戀、それが失戀、それに若い農夫同士の友情、うまい所をつかまへたもの。『えもなぐさめぬ』の一句に同情が溢れて作中の二人の影が見えるやう。氣障きざらになるべし。

與作、五作の名が、却て一首の調子を引緊めてゐる。『ぬ』どめの句に餘韻が無いなか云はる、批評家もあるやうだが、さう云ふ人にはこの『たり』どめの説明的である所に、却て面白味のある事が分るまい。

短歌に人の名を挿むことは古くあることで、何も明治の發明では無いが、但だここに同人の作で人名のあるのを擧げて見やう。余の舊作に「家持も眞淵も知らぬ韓山を我にまかせて歌よめよとや」などもあるし、近頃の作では『あひ宿に窪田通治の歌をめで泣く人見たり浪速江の秋』又『夕立の雲にのりきて人の子に歸へさ忘れし大町桂月』又『鐘に這ふ白き小蛇を見つるより酒骨が歌は蛇の氣の多さ』又いと子の作に『春着ぬふ姉のきぬ子を咎めましぬ針のはこびのわななくや何』又醉茗の作に『とどめあへぬそぞろ心のいでましに惟光めすよ春の夜の月』など。

わが笛を門にのこして人をまつにひろひし人もまたすて去る (梟庵作)

一代の風尚の劣等な世に生れて、あたら天才が一人の知己をも得ないで埋没して仕舞



ふのは遺憾千萬である。賣る者の罪だと云へば云はるもの、百歳の知己を俟つなどは負け惜みで、誰とて目の黒い内に喝采の聲を望まぬ者は無からう。適ま捨つてくられる者があるかと思へば、この笛は鳴らないと云ふので又棄てて行つて仕舞ふ。解心の人の無いほど誠に寂しい事は無いと云ふので、しつとりと打沈んで、心の底から泣いて居る歌である。

之にや、類似した歌は自負の嫌はあるが、余の作に『われならで先づ知りし子のすたれずやあらぬ反古にも道したはしき』又『酒をあげて地に問ふ誰か悲歌の友ぞ二十萬年この酒冷えぬ』又『よき音その鶯籠のせばさにもいさどほろしき我世となりぬ』又『山の巖になさけありき』と云ふ歌よ幾とせせば人ひろふべき』又『わが歌を悪しと云ふ人世にあるにあしたうれしき夕さびしき』又萩の家先生の作に『わが歌をあはれと云はむ人ふたり見いでて後に死なむとぞ思ふ』など。

馬を下りて酒のあたひを問ふ勿れこの西部利亞に老いむ二人ぞ (鐵幹作)

故國を逐はれて西部利亞の荒原に生涯を托してゐる二人の志士でも有らう。満腹の不平を忘るゝのには酒より外に物もない。酒と云つても邊土の酒で、連も都會の人の味ひ得るものではないが、今は習慣に成つて却て其れが唯一の美味である。酒の價などは論じるな、財布の底を拂つて飲めと云ふので、沙場の明月などに、胡婦の肩に醉を扶けられて、馬上に放歌する二壯士の風貌が、讀者の想像に上れば余の満足である。また余の作で『男手に袷衣のやぶれ獨ぬひて南の支那に秋の雲見る』なども、失意の志士が、姑く機會を南清に俟つて蟄伏してゐる有様で、不平の詩であることは能く似てゐる。

創たかを負ひて擔架たかのうへに子は笑みぬ嗚呼わさはひや人を殺す道 (鐵幹作)

親もあり戀もあるべきうら若い子に、無殘では無いか、忠義だ、勇壯だと云ふので、砲火のものにはは笑むで死ぬることを強ひる。そして一將功成つて萬骨枯るで、結局その子には何も報いられる所がない。余は國家として戦争は必要の事だと思つてゐる。



るけれど、人道としては無殘な事だと思ふ。かう云ふ考から晚翠子の『黒龍江上の悲劇』を激賞して置かないのである。

わかき子の王となのりて國ひとつ開く夢見ぬ黄河の南 (續幹作)

奪ひたる敵砲五十更にすゑて大野まもれば雪高う降る (同)

のこざりに似たる血がたな天地にとどめて死なば悔ゆることもあらじ (同)

これは豪壯な詩と云ふだけのこと。但だ内容に伴はさうと思つて、一首の調子にダルの無いやうと、漢語の用ゐる方に工夫した跡を見て貰へば満足である。質疑者は黄河と云ふことを問はれたが、夫位の地理が分らなくて詩を研究するなどは大膽である。また『敵砲五十』と限つたのを何故かと問はれたが、これは何も據る所は無い。五十門の分捕などは有り得べき事であるから用ゐたまで、この句は秀句でも何でも無いが初め作つた時には餘程苦心したので、この頃草稿を見ると、二十餘の砲として消し、大砲二十として消し、砲五十門として消し、やつと最後に敵砲五十と改めてある。無

益な事に苦心したものであるが、作家側の人には誰も覺ぬのある事で、斯う云ふ詰らぬ句にまで意外の無駄骨を折るのである。

又質疑者は鋸に似たと云ふ句を質されたが、奮闘して刀の刃が鋸のやうに缺けたと云ふまでのこと。

さりげなく御籤さぐりてはは笑みてさても春日の今日暮れ遅さ (いかづち作)

春晝の無聊を叙したまでで、『春思』など云つて春の懊惱を歌ふ程の煩悶があるのでは無い。『さりげなく』と云ふ句に重きを置いて見るのであらう。何のあてもあるので無く、無聊の餘りに御籤を探つて、心にもない御籤が出るので破顔してゐるのである。若い者も及ばぬ艶な歌が多い此翁の元氣には敬服する。

春晝の歌では余の舊作に『永き日をつみてすてたる花束に二つ舞ひよる蝶うるはし』また『繪の具とくに人狂はしの春の晝牡丹くづれて筆動かざりさ』また『そぞろにも紅梅ちりて日は永し小屋なる牛の鼻なでてみる』また『江に沿うて一里がほどの柳



はら柳かざして牛にのるかな』また『花の前にみすみす人は老ゆるものこの春の日もまた夕なり』などがある。

御籤、うらなひなども俗意のあるもので、厭味になるべきであるが、今日までは用ゐた人が少いせいゝか悪感も起らないやう。猶同人の作例を舉げると、通治氏の「何となく心はうれし占はよしきまさむ君を誰とさだめむ』また『ふたとるも宮のみくぢよあらざらむ夢に見ざりしこのあけの朝』また『初よみからむはさあれ心うのことし恵方を何れと知らず』また余の舊作に『御籤ひけば二十一吉とあらはれぬ神も知らじな我おもふ人』などがある。

鶴折るになれし人やと笑はれて春のゆふべを殿ぬけ出でし (戯作)  
複雑な材料を短い詩形に入れやうと心がけて作つた一つ。

仔細あつて假初に始く御殿奉公などの中にまじつた積りで有つたのが、淺ましい事には月日の立つ内に何時しか奉公人根性に成つて、今夜も春の宵のつれづれに紙鶴を折

つて御覽に入れてゐると、傍輩の侍女などから、鶴を折ることは巧いものぢや、慣れたものだと賞めるやうな冷かすやうな事を云はれて、ふと昔の初一念に復つて、何んぞ馬鹿々々しい、男が斯んな淺ましい奉公人根性で終るぢやなかつたと、憤然としてその夜かぎり御殿を脱け出したと云ふやうな梗概。この詩にこれだけの聯想が起るかどうだかは知らぬが、作者自身では作つた時の感興が然うであつたから、今もその通りに思つてゐる。

或人の云ふのでは、この歌は、うら若い男が殿に仕へてゐて、春の夕のすさびに鶴を折つて見せると、年上の侍女などに、艶な事を知つてゐる人ねと云ふやうなことを云はれて、羞しい餘りに、そのまゝ、庭下駄でも穿いたまゝ、逃げ出したと云ふ程の事だと、さうかも知れぬ。

猶このやうな複雑な内容を歌つた積りの余の歌を次に舉げて置かう。

妻が名はこの七村に唄はれて男名はなし十とせ草刈る



七箇村の唄にまで上つたほどの美人が、平凡な草刈男に添うて居ると云ふので、之から以上の聯想は人まぢく隨意である。

娘つれて詞に京のなごりあり御僧いづこへこの河わたる

四五の句は渡守の問ひと見ても又は乗合の人の問ひと見てもよい。作者は、娘つれてと云ひ、京の詞づかひと云ふ所に、何かこの老僧の閱歴が籠つてゐて、種々の聯想がある積りであるけれども、或人は唯美しい娘をつれた優なる姿の老僧と、渡し場との配合に興味があるに過ぎぬと云つてゐる。

また或人が、この歌はそれと季節は無いが、何となく春らしい歌であるとの評。

紐紅き鶯籠に見そめけむ人の玉手を米かしがする

事たがひ人おとろへぬ蚊やり火にはつれ毛うたて落の葉の雨

二首ながら時間の長い歌で、境遇の變遷を叙して、その落魄の中に戀愛の満足がある積り。

牧の馬を夕しかる子こゑさびしき昨日は國罵れる

政界に念を斷つて、田園に歸耕してゐる青年政治家、今昔の感に打たれて牧野の夕に思はず泣然と涙ぐむことも有らう。

年わかの追分上手この夏も載せて來よかし鯉釣る船

伊豆か何處かの島少女の戀である積り。一年に一度しか來ない鯉船に見初めた追分上手の一人が、果して今年もその船にまじつてくるか如何だか。

詩集手に豆の葉ならず人ふたり紀伊の霞は和泉より濃き

うら若い詩人、うら若い女詩人、そして美しい戀人である二人の春の旅。豆の葉ならずと云ふ二人の罪のない樂しげな様子が、和泉を経て紀伊の霞へはいつたと云ふ、春の暖かな平和な景色と調和して居れば作者は満足である。

この詩集は藤村君の集でもあらうか。

歌に名は相問はざりささいへひと夜ゑにしの外のみと夜とおぼすな (晶子作)



若い旅人、若い僧、若い美術家などに材を取つた歌の多いのは、この作者の一異色だ。若い詩人、うら若い女詩人、歌の上に名も問はずに別れた程のかりそめのひと夜の宿、そこにえも云はぬ趣味のあるのが戀では無いか。このひと夜、このかりそめのひと夜、これが幾萬劫の宿世であるかも知れぬ。

梟庵の作に『よりそひてかの鳩なにをささやけるすくせもつ子よゑにしむすばむ』通治氏の作に『さりとても夢にはあらぬその宵を忘れ給ふな忘れはせずよ』なども同じ境致。

さいへひと夜、ひと夜とおぼすな、『ひと夜』を重ねた修辭に忘れ難いなさけが溢れてゐる。

肩おちて經にゆらぎのそぞろ髪少女有心者春の雲濃き (同)

うら若い僧の細やかな肩に倚りそふたよわの人、そぞろや肩をすべつて經の上にゆらぐ黒髪、この少女とこの有心者との外に何の希望が有らう。御堂をつつむ春の雲の暖

かき。

同じ人の『堂の鐘ひくき夕を前髪の桃の蕾に經たまへ君』また『うらわかき僧よびさます春の窓ふり袖ふれて經くづれきぬ』夢水の『乞はむいざ御僧に救世の經あらば春をうつつの子に授けたまへ』何れも同じ題目。

經と云ひ有心者と云うて、僧の字を附けて無いのも面白いが、一二三の句が尤も修辭の巧みな所だ。そぞろ髪の造語も穩當である。

わかき子のこがれよりしは鑿のにはひ微妙の御相今日身にしみぬ (同)

ただ名手の作と聞いたばかりに慕ひよつた積りであるが、今はその藝術の御神の尊ぶを覺ゆるまでに成つた。藝術の人を動かすことは如此くである。

蝶郎の『人の云ふうつくしきとはあやまれりこの君されば鑿かくしませ』と云ふのは、時代の風尚の墮落は君の藝術を鑑識するの明が無い。かかる時代には寧ろ潜かに自らの研究を樂むより外は無からう。世に問へばとて却て嘲笑の材と成るに過ぎないから



と云ふので、おなじ藝術を歌つても場合が違つてゐる。

おりたちてうつつなき身の牡丹見ぬそぞろや夜を蝶のねにこし (同)

燭を秉つて燃ゆるやうな牡丹の花に、せめては此うつつなき春のもだえを慰めやうと思へば、却てこの眞夜中を花にねにくる蝶もあることか。ねたましさは更に我をそぞろに惱ましめるばかりである。

おなじ作者の『人かへさず暮れむの春の宵ごち小琴にもたす亂れ亂れ髪』も獨居の懊惱を極めた作であるが、待つ人も歸さずに暮れて行く春と云ふ所に複雑な聯想が見えるし、全篇の修辭が新しいので人を惹く力が勝つてゐる。

みだれごちまどひごちぞ頻なる百合ふむ神に乳掩ひあへず (同)

懸想の子、いまは愛の神の御前に何の顧みるところも無い。名も罪も道も頓着せぬが戀である。

百合ふむ神、乳掩ひあへぬ、かう繪畫的に云ひ現した所が面白いので、讀者は之に對

してまばゆい様な平和の光明に打たれる。裸形を詩に入れるのを兎角に批難する人のあるのは、寧ろその人の趣味の低いのを自白するもので、美感の上の事を陋劣な自己の實感で解釋する愚論である。我等は藝術の上に飽くまで是等の愚論と、東洋流の道徳を云云する偽善的論法と排斥する。

夜の室に畫の具かぎよる懸想の子太古の神に春似たらすや (同)

春の宵を身も心もそぞろに成つて、繪の具の香に慕ひよる戀の子、裸形の子、なにの事はない希臘上代の女神の御姿そのままである。前の歌では『戀』を『百合ふむ神』としてあるが、これでは『春の夜の繪の具』に喩へてある。

更に委しく云へば、夜の室の今一人を——戀人を——繪の具に喩へたもの。『似たらすや』と問ひの句法を用ゐたので、夜の室に今一人のうら若い懸想の子が見える。

神の脊にひろきながめを願はずや今かたかたの袖こむらさき (同)

二つの袖を擬人にして、戀の成就を願へと云ふのは頗る奇想で、句法もまた頗る突飛



だ。

一つの袖は既に肩より脊へ掛けられてゐる。今かた／＼の袖も神の御脊に上つて、戀の廣野をながめやうとは願はぬか。

二つの袖が神の御肩より御脊に合せられた時、神の御口は我が熱き頬へ、戀の成就是その時である。

今かた一方の紫の袖よ、又は今かた一方の袖の紫よ、と云ふべき所を『袖こひるさか』と云ふ新しい句法を用ゐたので、舊文法に拘泥する人達には一寸分らない。

全体詩に貴ぶ『清新』と云ふことは内容の變化を意味する計りでない、詩形の進歩を要求してゐる事は無論である。詩をいつまでも、我身一つの秋にはあらねど、目にこそ見えぬ秋は來にけり、蜘蛛のふるまひ兼ねてしるしも、と云ふ様な句法でやらねばならぬと思つてゐる人達には話せないが、詩形の進歩は當然の事で、その上に新しい造語、新しい語法、新しい語法を發明して用ゐるのは、詩才ある者の特權である。自己の頭

腦の進歩に伴はない事を知らずに、最近の短詩長詩を一概に理解し難いと攻撃する人のあるのは、識者の頗る答に苦む所であらう。

のがれにし夢やしばしと呼びかへすけはひと見つる雲雀なるもの (通法作)

『つばすみれつみつくれれば住の江の遠里小野に雲雀なくなり』今もこんなものが舊體で喜ばれる『雲雀』の歌、おなじ雲雀の歌だから一寸對照して、趣味の相違を示して置く。

雲雀の雲に消えるのを仰いだ時の感想は、恰も今しばしと留めて留めあへぬ夢中の人のはひ。さて作者の美しい朝の夢から逃れ出づるその姿は、霓裳素琴の神の御姿であらうか、香魂永く天上にある相思の人であらうか。

吹き下ろす夕山あらしたとふればやはさ手とりて走すらむ我か (同)

山おろす夕かせのやはらかく、心地よい所に、何となく艶なときめきも見えて、織やかな愛人の手を取つて戀に馳せゆく宵のさまにも似てゐる。



對比の巧いことは前の歌に似てゐるが、『たとふれば』と直喩に云つたのが劣つてゐる。消えてゆく雲の一すぢ野の家のとありし宵のわすられ難さ (同)

一抹の雲もまた多感の子が萬千の愁を催す料である。行き暮れし野の家のみと夜語り、その夕の雲の色もまた如此ならざりしか、歡會は夢の如し、相見し子今はいづこぞ。顧みて追懐の情を禁じ難い。

雲と野の家に昔の景色や場處が能く想像され、とありし宵に長い時間が含まれ、またその夜の事情が能く想像される。これやわが残りの幸さいちからうらぶれし旅の姿を泣かむ母なき (同)

飄零兒、不遇兒、わが名の上に何の幸一つ持たぬ身、しかし唯一つ仕合な事がある、これがせめて我が幸福の名残とでも云はうか、おめくくと今日國に歸つてきたが、この破れた旅のさまの生耻を見せて、お泣かせ申す母上の無いだけが我が幸福だ。お互に母の無い身、作者の意中を想ひ、また自ら顧みて、悵然たらざるを得ない。

二十とせの夢よと人もさは云ひき嗚呼ただ是れや美しい痛手 (碎雨作)

相思うて遂げず、君歎いて云く、はかないかな二十年の夢。我れ自ら慰めて云ふ、唯だ是れ美しい矢創。嗚呼この夢遂に覺むる朝なく、この痛手遂に癒ゆる夕なし。

『嗚呼ただこれや』の句に、自ら慰めやうとして慰さめられぬ失戀の煩悶が溢れてゐる。『美しい痛手』は深酷な句、美しい造語。

誰どの闇われと答へて探りよる人のこの身よ小さくしもあらず (葉袖作)

闇夜の忍び音、『誰ぞ』とはさては君よ、『我れぞ』と答へて手探りによる袖の香、人、戀には遂に何はばからぬ天地、膽きふとき猛ま者なるかな。

『誰ぞと聲する闇の中』と云ふべきを、『誰どの闇』とは例の新しい造語。前に挙げた晶子の『人かへさず暮れむの春』と短長の差はあるけれども、造語の形式は似てゐる。

おぼろげの夕戸のかげの白き花君と世にもつさだめ知りさや (蝶郎作)

夕ぐれの戸に見る白い花の、心細う寂しいのに、なにか二人の戀の行末がさとされて



あるやう。君もそれは頷くであらう。

白い花に戀の運命をはかなむ歌の例は、晶子の『十九のわれすでに董を白く見し水はやつれぬ果敢なかるべき』などがあるし、また花の心細さに譬へたのでは、余が『似ずやこれ人に別れし後の思ひ葉かけの花の一つさびしき』などの作もある。

その色を花にもとめて絲に得む天のゑにしあめの臙脂紫まじらまき (まさ子作)

ゑんじ紫は晶子の造語で、それを愛の深酷な標色に用ゐたのが、今では多くの人がその意味で用ゐるやうに成つた。余の作に『ゑんじ色に人はたもとを染めなれてまだしと云ひぬわが濃紫』また晶子の作に『ゑんじ色はたれにかたらむ血のゆらぎ春のおもひのさかりの命』と云ひ『室むろの神に御肩みかたかけつつひれふしぬゑんじなればの宵ひごかりの一襲』などは、皆その意味である。

ゑんじ紫は天上の色、戀のなさけの極致の色、その色を花にもとめて、君と我とのゑにしあめの絲を染めたい。輕浮な戀を厭ふ意味もある。

森の秋に沈ちぢの木朽ちて香を見たり嗚呼ただ人は闇に倒るる (綴幹作)

小人の讒に遭つて大人物の一世に誤解され、空しく恨を呑んで亡びると云ふのは、古の事ばかりで無さ。

森の秋に百木の朽ちるのは有る習ひと云へ、名木沈のやうなものまでが朽つるとは悲むべき事では無いか。が然し沈は猶朽ちても香をとどめて朽ちて行くのを見た。それに人は如何だ。曠世の志は抱きながら、斗南一人の才は負ひながら、嗚呼空しく誤解の闇中に斃されて仕舞ふ。

夕川を西へ渡るの輿の人去年の一人におもざし似るな (同)

去年の秋なりし、このごろなりし、その人いひたきこと皆は云はで羅州へ母が許に、とくせずば國の守に罪おふべしと、怖ろしき文うけしその日の夕つ方、せめて輿だけは遠だしき中にも美さを呼ばせて、さりや今ゆく人のやう、従者ひとり具して、知らねばこそ、つひの別れの見かへりがちなる二十姿、胃をよく病む人の忘れし持藥、わ



れ追ひ行きて、手づからくれて、葦の花間に梧柳洞の方遠き野の夕靄、うすれ果てし  
 後も、猶たゆたひの我が影、われその頃斯くまでは瘦せぬ身なりし。今この門すぎし  
 輿、草いろの覆衣に、紅梅の羅の帳、透き影わざと覗かず、ただ聲の、ただ輿の、似  
 よりたる昔ぞしのぼする。われはおもはず柱によりて眼を掩ひぬ。――

太秦の祭をかしき月の闇鬼の一人に袂ひかれし (同)

山城太秦の牛祭に、鬼形の人が行列をして出る神事がある。京から見物に来た娘づれ  
 が、その鬼の面をつけた一人に堂の暗がりかなんかで袖でも引れたのであらう。祭の  
 夜のざればんだ状が見えれば作者は満足なり。『月の闇』は月夜の物かげの闇を表はさ  
 うとした造語。

葛城の御神しのびに背に負ひて遠き常世へ住みも果てばや (同)

みにくしと羞らひ給ふ葛城の女神、夜ならでは出で給はぬ女神、ここは人の口のさわ  
 がしき國、偽善の國、虚飾の國、嫉みの國、咀ひの國、とく去らせ給へ、我れ負ひま

つりて御供つかへ、遠き空に安き國つくりまゐらせむ。

神ここに力をわびぬとき紅にはひ興がるめしひの少女 (晶子作)

あまり戀に狂ふので、神は姑らく少女を盲にしたが、やはり少女は盲のまま解き紅の  
 にはひに慕ひ寄つてならぬ。神も戀の力には手が附けられぬと云つて、その御力の及  
 ばぬことを歎息して入らつしやる。

解き紅は紅の解いたので、作者の造語だ。『神ここに力をわびぬ』と勿體らしく叙した  
 處に、少女を盲にしたのも神の御所爲だと云ふことが想像される。

牧場出でて南へ走る水ながしさても緑の野にふさふ君 (同)

一二三は心持よい叙景で、それに四五の句は田園詩人を配してある。この緑の野にふ  
 さはしい詩人は、うら若い美しい詩人であらう。『さても』と云ふ語を無意義に挿んだ  
 と思つては成らぬ。若い詩人が田園生活などの老人じみた淋しい事を云ふでも無から  
 うと思つてゐるに、さてもこの春水緑野の間に君を見ると、この大幅の生氣ある景色



が、能く君がうら若い眉目に適して、まことに青春の詩人をして、その詩懐を養はしむるに叶つた處だと思ふ。

ひとたびは神よりさらにはひ高き朝をつつしみ練の下襲ねりしたふさね (同)

美しい練の下着を假りて、おのが戀の傲を歌つたもの。物皆清き朝の世界を領し給ふ神は、云ふまでもなく氣高い神であるが、その神よりも猶高い戀を包んだ朝のある我身ぞとの意。「朝をつつみし」と云ふ修辭が新警である。

病むわれにその子五つの年なご下なり拙ななの笛をあはれと聴く夜 (同)

満足に節も調はぬほどの笛を吹いて、よそながら家近く我病を慰め寄る子、十四五の、まだ戀とも、戀で無いとも知らぬほどの子、ただ我をなつかしとばかりに慰め寄る子、こなたもその幼い情のいぢらしさを嬉しと思はぬでも無いが、さりとして五つの年した、戀と云ふでもなし、ただよそながら其笛をあはれと聴く夜に、面白い人情の自然が溢れてゐる。

つたなき笛のぬしは五つの年した、十四五の少年のやうに想像される。

そと秘めし春のゆふべのちさき夢はぐれさせつる十三絃よ (同)

春の夕の何となく人なつかしい思ひ、さは云へただかりそめの小さなまどひごち、譬へて云へば夢のやうな思ひをふと胸に得たと思つたのが、琴を調べてゐる間に何時か忘れて了うた。おほかた琴が何處かへ其思ひを隠したのであらう。夢のやうな思ひも、琴に得た興も、ともに能く春の夕のそぞろな亂れごころを表はしてゐる。

夜の帳にささめき盡さし星の今を下界の人の鬢のはつれよ (同)

天上の夜の帳の歡話が蜜の如くあまく、圓滿であつたに引替へて、下界に降された星の子の我は、今を戀の得がたきに瘦せて、色なき鬢の如何に亂れ多きかを見給へ。

これは『みだれ髪』の巻頭の作で、寧ろ露骨に戀の懊惱を叙してあるから、苟も散文と韻文との修辭の區別を知つて居る人には、至極分り易い歌である。今の高名な評家が、之を晦澁な解せぬ歌だとか、甚しきは卑猥な歌だとか云はるゝのは諸君が何かの



思ひちがひか、或は作者を啓發する一時の惡謔であらう。

あはれ知る人とは云はし我のみの明日の痛手を語る友なき (業袖作)

新詩社で一人この人の作ばかりは、抽象的の叙法に傾いて居るから、他の色彩の多い具象的の作に慣れた眼で見れば、餘程解しにくいだらうと思ふ。

これは人の終焉に侍しての作。今の世に同情のある人を得て、同情をかけて貰はうとは云はぬ。せめて我が明日から以後、人に死に別れて後、わが一人でする歎き(胸の痛手)を語るだけの友は欲しいと思ふけれど、その單に語るだけの友すら今の世には無き。

明日の知己の無いのは、やがて終焉の人を惜むのである。

今そこに一人をはりの君と見て消なむ現の又しきりなる (同)

おなじく終焉に侍しての作。今の現實界の厭はしくて、得べくんば我身が消えて了むたいと幾たび思つたが、今そこに一人、われより先に天上の高さに還る人があるのを

見て、又このうつし世から消えて了むたい願ひが頻りに起つてくる。

世を去りたいと云ふのは、やがて終焉の人を慕ふのである。

こころ夜を夢やふたたび君見つと思ふばかりに老いむ一人か (同)

おなじ時の作。今はもう夢ならでは逢ひがたい君に成つた。多くの夜を、昨夜も夢に君を見た、君を見た、夢の中の君を慕ふだけで、君に再び逢ふことも無くて、この後の一生を老いねば成らない我身か。

夢をたのむと云ふのも、せめての慰藉ではあるが、のこされた人の生涯は淋しい事である。

美しのその髪とはの君なりと丈なるほどを來む世に待たむ (同)

これは幼き女の兒の亡くなつたのを悲んだ歌。その幼な髪のは美しいのは永久に變らぬ君であると思ふから、この世では、遺憾ながら、その髪のはにのびた君のまばゆい姿を見なかつたけれど、それは我が次の生で見る事が出来るやうと祈つて居る。



をさな兒に二世をかけたのは、珍しい情の深い作だ。之を贈られた親達も、せめては此作者の同情に少からぬ慰藉を得たであらう。

思ならぬ思と解きて笑みすぎぬ一もとほろ水のゆかりよ (同)

ただ何となく水の流に沿うてきて、いつか一つの社のある處に出たが、ふと立ち留つて、さて又、神などは我に適せない思だ、こゝへは唯だ水のゆかりで來たばかりだと、我心に我と解いて、軽く微笑んで通り過ぎた。

作者の意は知らぬけれど、一首の寓意は、戀の子詩の子である我等に、人道だ宗教だ倫理だ道德だと云ふやうな煩鎖な事は顧みるに足らぬと云ふのであらう。

戀ここに石とわびたる二千年太古ひさしく國に歌なき (白仁秋津作)

道德だ倫理だと云ふやうな、人為の規則に壓迫せられてゐた東洋の戀愛は恰も化石のやうに冷いものに成つてゐる。古來誦すべき戀愛詩の一大雄篇を持たない國民は、まことに寂寥の歎に堪へない。

百合の譜を君に許せし星のとがめ千とせ真白き野川の石よ (鐵幹作)

野川の石、詩人に語つて云く。われもと天上の侍女、百合花の秘譜を偷んで情郎に教へしに由つて、降されて野川の石と化さる。見ずや石の白きは、猶天上の玉膚を失はざるなり。

武藏野にとる手たよげの草月夜かくてもつよく京を出できや (同)

草月夜の造語に、縁にこもる武藏野の月夜を想像すべからずや。手に倚る一人の人、鼻々として露に堪へざるが如き人、この野に伴はむはいとはし。さるにても強かりきな、東二百里、人を追ひて遠く京を出でこしも君にあらずや。

御使の童子の神の御手のたゆげ戀の冠の七色瓔珞 (同)

わが戀成りぬ。愛の御神の御贈物を見ずや。銀箭金翅の童神、持して賜るに、虹の寶冠織き御手に重く、七色の瓔珞、鏗爾として紫の雲に鳴れり。

この世われ五千里の北星ひくき山の雪にもいさどほろしき (同)



せめては忘れ得べしやと、五千里の北の荒國、北斗の影も低く頭上にかゝる山の頂に、この熱いかに冷えよと臥して見れども、猶われには、この世腹立たしく、世の人怨めしく、遂に滿腹の不平を銷するに由なきなり。

野のゆふへすみれひそかにさゝやきぬおなじ根ざしの友にとがあり (同)

すみれ云く、君われともに天上の花、同根の花、しばらく君は少女となり、われはすみれとなりて地上にあり。君今戀に悶ゆと聞くそれ羨むべし、そは神に得たる美しき罪科なれば。

世に立たむ榮よ力よ君によりて今日わが得たる美しき鞭 (同)

愛の矢は曾て西の詩人に聴けり。われを鞭ちて世に勇ましむるものは、われ唯一の『戀』なるを知りぬ。

わりなくも寒さくりやの掛けわなにおちし鼠をうらやむ思 (同)

貧居の我れ、苦寒骨に徹す。而も營々として耻を忍ぶもの、聊か別に志の期する所あ

り、樂みの改め難きものあればなり。然れども人情の痴、時にかけ筭に落ちし餓鼠の安さを羨まむとす。われの詩、遂にわれを掩ふ能はざるなり。



十一、新詩集

虹 影

(明治卅四年四月より九月までの作)

○ 行きずりの藪ごしに見る牧場垣世に疲れたる身を歎げかしむ

○ 太秦ついでの祭をかしき月の闇鬼のひとりに袂ひかれし

○ 桐擡けて五彩の鳥を山に見ず秋風われを起す子の無き

○ 敢て我れ紫金しきの冠いなみまつる傍への一人御眼ひごりみめに入らずや

○ 筆篋ふでばこに一つふえたる京の紅あけねたしと底の瘦せしが泣きぬ

○ まこと君断たれむものか断ちたまへ長きつるぎに水は流るゝ

○ 河ぞひの合歡花あはれの薄月わすれますな里のふた夜を御手に倚りし子

○ 河を西へ柳の鞭の若さふたり信濃とのみに一人わすれぬ

○ ひかざりしひきしまどひの幼なごこち宵の御堂の袂とのみよ

○ うらわかき御僧みだうとのみに忘れがたき月のしら蓮嵯峨のおばしま



○ 夕川を西へ渡るの輿の人去年の一人におもさし似るな

○ きよき乳や兒のいさましき朝啼やさいへさびしき別れの車

○ われ似すや上羽みながら血に染みて春の入日にかへりこし鳩

○ よわき鳩のそれ期せる征矢さりながら弓とる子らのあまりかしてげ

○ 森の秋に沈の木くちて香を見たりあゝただ人は闇に倒るゝ

○ 意氣もなに名もなに戀も歌もなに我れ今石のつめたさを知りぬ

○ わが上のもどきみながら戀の上とそれにくからず二十九の春

○ 智慧の敗れなさけの亂れ何か不朽君見よ名にはあざけり添ひぬ

○ 野のゆふべ鳥の行方に涙おちぬわが世もちさく低く遠き其れ

○ みづいろの紹蚊帳の裾の紅二尺おさへてやらと嵯峨の夜の神

○ とき髪に眞晝の歌の神のむれ森の泉は百合の香に成りぬ

○ 鳶の花に雨の香さむき堂のひと夜ひと夜の我に尼の君泣く



○ 竹にねしはそよ嵯峨の夏人ここに奈良のふるさと水色のきぬ

○ 百合の香にあま戸そとくる露の朝夢かのさまの蝶と人と見る

○ 天あめにしてあしたの虹に寄りし子の一人はここに夕の柱

○ 草くさの筆の優なるみだれわかき人や朝目すいしき桔梗の小椽

○ 陀羅尼だらにそれも夕ときめく月あかりみ僧を載せて紅蓮ぐんれんに入りぬ

○ 嵯峨の水にくちなし染の裳のかをり宵ときめきの夏の御神よ

○ 思おもひなり竹をはなるる朝の雲われやまどひの君や智慧の子

○ 松の繪に夜寒を山の神樂堂舞衣まひぎぬながらまるびていねし

○ 火影わかう人うの花の挿頭かざしなり揉むや歌反古韓の紙あをき

○ わか葦によき人おはすとまり船吳の僧去りて朝の鐘鳴る

○ これ小さこれおぼつかなこれはかな覆盆子のはこり梅の實の智慧

○ 人へ書きぬ蚊やり火むせぶ柿の花に雨も趣味ある里居の二人



○ わりなきにそぞろに人に人の罪にわれ二十九の春めしひたり

○ いつの春かわかきけなげの一人子ひとりこをもてあましたる國のちひさき

○ 廊すだれを西へ月おちかかるすだれ簾れん艶えんに人みづいろの朝顔説きぬ

○ 春七日本屋街は雨嗟峨は月ゆくにみな花あふにみな戀

○ 詩集手に豆の葉ならず人ふたり紀伊の霞は和泉より濃き

○ かたへ梅かたへ竹なる戸の寒さ人まちわびてゆふべ歌なき

○ 繪の具とくに人くるはしの春の晝牡丹くづれて筆の動かぬ

○ 秋寒を竹さゝやきて怨み負ひぬ樓の火影ほかげのむつまじき宵

○ 鑿いと云はず命めすべし不動の咒生血いさちたばしれ御經みきやうの裏へ

○ 人の名の北京の城もよそに聞く益荒男秋の花のあるじよ

○ 朝あけの野邊のむらさき袖は四つ美しくしいかな君と我と見る

○ 許されて地上の花に燃えぞ燃ゆるこれ我歌わがうたに外ほかならぬ光明ひかり



秋を倚る樓三層の彩の欄三十六の山の入目よ

帳あげて牡丹が晝にくらへ見ぬ虹の被衣のわが戀ころも

武さし野に竹椽つけし片びさし槐樹ふたもと秋の富士濃さ

はとゝぎす村雨はれし上嵯峨の竹の宵月戀にはあらぬよ

夕雲の野分に聞きぬしろがねの秋の轡の駒の嘶さ

百合の譜を君にゆるせし星のとがめ千とせ真白き野川の石よ

朝の虹ゆふべの虹に酔ふか牡丹御園に仰ぐ御馬の袂

宵月にうすものたたむ宇治の樓十九の夏の瘦のすぎすや

夕倚るに蓮かれがれの池の御堂菩提たまへの我れ有髪の僧

秋花にほのくれなゐの嫉み雲野の神ゆふべ被ぎて往きぬ

京やひがし浪速に笛の音のあはれ市女が袖の春のむくろよ

西吹きて明日や筑紫のたより聞かむこよひ泊りの松前追分



○ 武藏野にとる手たよげの草月夜かくてもつよく京を出でさや

○ 御衣みぎの香にわれ羞らひの宵の眸欄まみの芙蓉の垂れ葉に倚りぬ

○ 葛城の御神しのびに背に負ひて遠き常世とこよへ住みも果てばや

○ 昨日明日憂きと痛みの闇の戸に紅あけあたたかき悶えの一夜

○ 金の間に晝のうまいの春の人孔雀しづかに彩羽あやはつくろへ

○ 樽して人馬はたらひ盃はたらひに流れ汲む里の小百合の宵薄月夜

○ 野の月に米つく音の家いづこ薄の小川すゑ遠白き

○ 稻妻や金剛神の夕あらび金の兜をすべりて燃えぬ

○ 西加茂に桔梗たむくる竹月夜名づけ親なる尼が御墓や (蓮月尼の墓にて)

○ 聖の甕かみに神の封つの才許りて夕の歌の酒と溢るゝ

○ 宇治の水に人の染めたる夏の集わふればこそそのほそき眉筆

○ 露の戸を桔梗にわふる人の小褙みつき三月里居ささごの朝道遙よ



○ 詩に悶えて今宵微妙の天の扉酒ぬすむ子に衣被け給へ

○ 清瀧の水車が小屋の合歡花の晝十九の歌に肩かせし君

○ 萩の神の桔梗に嫁ぐ夏の野を載せて送るか黄金日車

金 桂

○ 武藏野に亂れ興がる秋の鬢草の小虹枕おごる人

くれなるの蝶の一つのやりどころこの子が嫉み詩に美しき

武藏野に友を迎ふる秋の二人君知る世どと瘦を掩はぬ (泉庵來る)

春花になさけ染めたる歌の君を草の武藏の戸に籠らする

○ われとこそ歌の硯に下り立ちし尊菜の水の手に寒き朝

○ 君が馬しろし我馬黄なる別れこの朝河は何地流るや

領きて秋の野歸る近江の人なさけ此世にうら若いかな

○ 折れ櫛の秋の手さはり冷たさのわび寢の里よ鐘こもりがち

○ 江の月に霜に千鳥の夜も慣れぬ笑ひたまふな京に似ぬ髪

○ 霜の戸に夢より覺めし蔓小草笛に添はぬを竹になげける



歌に斯くの聖旨もつ身の知りしだにその昨日だに清かりし眉

秋の雲にわがうらわかき頬ぞ燃ゆる誰と拍たむの詩の掌

手力雄われどと笑みし地の人の戀のひかりの朝を見しや歌

紙燭さす秋の夜殿に満つる香のしら菊さらに人白かりし

麥の帽に挿頭は菊の紅き白き牛車がらがら都に入らむ

ここ室津となりの船の私語や雁低うして月はそき潮

ゆかしさを夜の木扉に假りし人さかしと見つれ憎くしも無き

わかき僧に少女時雨の切れ草鞋裂かせまつるな鐘に倚る袖

蝶いくつ黄なるが過ぎて鐘ぞ迷ふ螺鈿落葉に光なき寺

文珠出でて我と對する樽念佛達磨夜すから酒盃おかぬ

まゐらする袈裟の御肩の瘦せやうや老師を小さき御弟子に泣きぬ

人病みて繪絹に才の眉ほそし身に浸む宿や蓼の香の水

かきさしの繪絹の人の袖に消えぬ宵の繪血のはの白き蛇

しら菊に御衣の薫りの殿高し歌には秋の雪十二欄

わびし庭に稀の御文の夕使ひしろき雄鹿に舞衣かけぬ



賊の火の紫竹を焼きし夜のみだれ手綱に泣けるあわただしの人

○ 羽かはし南へくだる白き雁こなる水に菊の香や無き

菊の香に酒の甕をめぐる朝機なる人の歌に笑まるる

○ 唄きよう朝溪くだる棹の子をまぎれさせつよ竹に淡き露

ひと枝は伊賀山こえし秋の興と會釋にわかき夕船の僧

○ 世の秋にわが師わが友つらからず歌には幼な道に笑む今

美しう悔知らぬ子の笑みを見よ我ぞ我名を踏みて墜ちにし

○ わりなしや引くは紅なる蔓とのみ果實こぼれて染まりにし綾

○ 蓼紅う千曲の川の北に長き船子われらも佐久に留まらむ

友の詩に別れがたさの秋は盡く朝を笠寒小諸立つ馬

○ 水色の絲のもつれは誰がとがぞあやなく人に恨み負ふ夜や

○ やがて見よ幾人高う追ひも來む聖の宮殿の鑰に笑む朝

一たびは男子の笑みに我を見て人小さいかな戸にはぐれたり

○ 忘れても左たもとの詩の舊稿に今の博士の肩を打つな人 (晶子に)

○ ここにして稀なる笑みの二人見つ武藏出づるに誇らしの河



そや昨日われ天地にとぞ見つれ覆ふに今朝は一人ならぬ袖

○

なにとなき草の香のせてうかぶ風まてな行方は我もその西

いかなればふと亡き親はしのばるるゆらぎて行くよ野の名なし水

○

御筆たまへ御膝の人の酔の間を牡丹に假りし歌誰に似る

○

御筆ある天の御柱見てぞ來し、とのささやきや花に細る雨

赤 裸 裸 歌

(一)

栗の花水に散る

澁谷の村の眞晝

ひくき茅籬の下

鶏飼ふ家の東

五月の森の闇を眺めて

友と此の詩を吟ず

如何に君おもへ

栗の花の寒さに



栗の毬いぶきの籠かごきに  
人棄すてて秋の實さか奪さらずば  
寧さろ其れ栗の幸さちか

清つきを藏かくむもの

甘あまきを抱かかくもの

天てんの美うを慕こふもの

地ちの悪あくを憎にくむもの

あゝ災禍わざはひや世よにありて

何なにれか嫉妬ねたみ負おはぬ

また如何いかにおもへ

人何ひとの聲こゑに目覺めめて

夢ゆめより聞きより

この美うしき朝あを拜まむ

神かみの御旨みこしの八聲やっしやうなくば

昏々ぼんぼんとして皆夢死ゆめじの骨ほね

先まづ叫こゑぶ者は烹たらる

功いさある者は亡なさる

不法ふぽうなり

陰險いんげんなり

暴戾ぼうりなり

無殘むぜんなり



見よ見よ日たけて後  
人その恩友を厨に裂く

(二)

如何に君おもへ

我れ之を童子の語に聞けり

『男の子地に落ちて

自おのづから七人の誓かたきもつ』と

この島國しまくにの小なるに似ず

何ぞ此の俚語りごの壯なるや

否、否、

世を擧げて皆敵するも

昂然として立ち

猛然として戦ひ

悠然として進軍の曲を奏す

あゝ君さならずや

これ大丈夫の事

何の右手みぎぞ

これ劔を執るに適あふ

陣に臨んで敵を討たず

世に立つて暴を誅せず

市に入つて弱きを助けずば



男の子手あるも何の用ぞ

樵夫きりうとならば我れ

珊瑚さんごを伐つて薪まき

漁夫あまとならば我れ

蛟龍なまずを釣つて膾なまず

西に行かずば東

火に入らずば水

男の子信ずるに踏たづなはず

たゞ極度より極度

性は清く圓く

形かたちは猛く男々しく

劍を按じて立つに

さながら活ける愛染あいぜん

人射るべくばいざ射よ

ここに赤裸裸の子われ

(三)

如向に君おもへ

丈夫快心の事全く廢れず

クルウゲルや

アギナルドや

海の外今稀に健兒を見る



偽善の文明に抗して

堂々の義兵世を聳動す

しかも彼等は破れたり

彼等は終に破れたり

あゝ革命の億業や

この新しき世紀に適せざるか

また如何におもへ

大塊たいくわいの上に國して

二千五百六十年の久しき

神武天皇の子孫ここにあり

あゝ危いかな現代の彼等

死學問

無用の書

徒らに文明の虚飾に酔うて

父祖建國の大義を忘る

農と兵とを備へて

未だ亡びし國あるを聞かず

儒を坑あなにして覇たりし者

曾て秦の英主に見たり

誰かその無用の書を反古に賣つて

一挺の鋤に換ゆるを主張せざる



一片<sup>ビイター</sup>彼得の遺訓

見す見す亞細亞の地圖を改むるに  
空しく十四師團の兵を擁して  
大學の増設を急とするは誰  
あゝ聰明なるかな  
父祖を辱めず  
わが神武天皇の子孫

(四)

如何に君おもへ  
問ふべきは稀に

語るべきは遠し

大丈夫の道

あゝ今いたく寂びぬ

咄何のさかしらぞ

ゆふべ野の木がくれ

ちさき矢に毒ぬり

玩具の弓をしぼつて

笑止や童子我に擬する

否責めし罪問はじ

近う寄りて名を告れ



弓ひくは男の子のわざ  
寧ろ意地あるを憐む

ただ童子に誨ふ

射るべくば地上の敵を射よ

ゆめ天部に向いて放つ勿れ

その矢の落つるに

必ず傷く者は汝なり

如何にわが友

手を拍つて更に和せよ

『性は清く圓く』

形は猛く男々しく

劍を按じて立つに

さながら活ける愛染

人射るべくばいざ射よ

ここに赤裸裸の子われ』

射さするも他人の血ならず

流れて桃花の紅と染まば

見よ男兒七尺の裸形

如何に莊嚴の美を極めむ

(三十四年の匿名の狹兒あり、文壇照鏡與謝野鐵幹と題する一書を公にして余を百方中傷す  
余一笑して此作あり。)



夏草

人瘦せて竹に  
 無聊や澁谷の三月  
 この子奮闘の子  
 さては愁の清き適せず  
 あな心細の眉筆  
 墨ひくは警家の名か  
 かきさしの集興を忘じて  
 紅き紫歌のみだれ  
 あした戸に倚るに

まどひあり垣の朝顔  
 こぼれしに蔓のびて  
 さく花みづ色のささ縁  
 終に是れ人の私  
 天の愛に劣るか  
 青玉の瓶にいつくも  
 葵の紅は萎れたり  
 日中野川に馬洗ひて  
 鞭かろき歸さのすさび  
 覆盆子なでして小百合の花  
 縁ひろき麥の帽に餘る



これあはれのもの  
小さくして高さもの  
夕の粧簾戸になりて  
待つ君嫉むも  
髪さげし幼な戀  
西の隣の娘に遣らむ  
夕雲まよふ富士のあなた  
戀ふるに友の空遠き  
病む者は聖なるに  
詩の神よ今旨ひぬ  
君病む身を筆奪はせて

終に人の子に降ると  
嗚呼それまことか  
我れ泣かざらむや  
友白浪の文

(三十四)の夏遊谷に於て作る

昨夜の君

昨夜の君さらば安かれ  
このころも日中剝がれて  
百二百耻辱の筈に  
市の子が我し責むるも



仰ぎ組む胸の手の下  
秘めし名を誰に許さむ

昨夜の君さらば安かれ

野狐は葡萄に來寄る

假庵して守る要あらぬ

笛だきて忍び泣すと

ただ弱く窓に倚る子に

神の間ふ科はあらじな

昨夜の君さらば安かれ

忘れよと忘れもすべし

薄朴なる我といふもの

ひと言の君がなさけも

背かじと三とせ期しつれ

忘れよと忘れもすべし

昨夜の君さらば安かれ

賢くも戀を擇ふと

商估の道にも似るよ

幼稚かる我は幸なり

君にしも學びぞ得たる

別るるに涙なき旅

(三十四年四月作)



嘔血行

黒き蝮蛇まむしを寸に断て  
 寸の肉もまた動かむ  
 友の戀は奪はれたり  
 友の名は汚れたり  
 誰か山の石一つ下  
 友怨さびなく眠ると思ふや  
 屍しかばねに鞭加へて  
 朝凱歌あしたを奏する人  
 主なき鳩かじを捕へて

夕酒に快樂けらくを説く者  
 如此くにして勝利を誇る  
 嗚呼嗚呼卿等は譽なり  
 三年の愛は他人に  
 十年の政敵は廟廊に  
 友の墓を飾るもの  
 衰殘うつろふに花もまた秋  
 嗚呼友よ友よ  
 汝能く死すべきや  
 汝の世に功ある



厚く報ひらるべし

汝の人を愛したる

懸ろに吊はるべし

嗚呼なんぞ知らむ

この薄伴の友の手

手向けむや一杯の酒

寒いかな秀でし人の祭祀まつり

都を出で、我れ

友の墓に籠る二日

遠江の山

嗚呼恨み多き處

夕僧と霜に撞く鐘

餘韻長うして涙流る

(三十四年六月作)

ふるあはせ

槐園に與ふ

松の葉を蚊遣にたきて韓かんの兒の歌きく夜半や涼しかるらむ

待ちわびぬ君を千さとの旅におきてはては石にや成らむとすらむ

父の墓にて

墓の上に三十六の山青しまもるか親の詩にかをる屍かばね



醉茗に

歌ならでひと夜を酒に笑はばや君もこの秋思ふこと有らむ

○ 月の夜を松原くろく海しろき濱寺の磯に物をこそ思へ

○ すみわたる秋のところにあくがれて木犀もくせいの香はにほひ出づらむ

○ その事の思ふやうに成りしに

○ 手をあげて日を招きしもあやしまず今は山さへ抜きてのけたる

○ くやしくもよわきなさけを見えしかな誰がためにとて我は痩せたる

○ えにしあらばいかで佛に成らざらむ石にも袈裟をかけてこそおけ

○ 世の中にめでたき歌を玉と云へば山に埋めてあるべかりけり

○ うるはしき姿に人のものを云ふ鸚鵡は鳥か君は少女をこめなり

○ 花束の白きをとりて紅きをばなどかすてたる君は受けながら

○ 筆を嚙んで幾たび嚙んで棄てて見れど世の事は難し歌は成し易き

○ のがれたるえびすの船に見ゆるかな千島の沖の秋の夜の月

○ 松の葉のみどりに染めてもみぢ葉のくれなるちらす衣笠の山



官妓蓮花

ときいろの君がころもにふさひたる山吹の花から桃の花  
詞かはる歌のなさは知らねども君が聲きけば涙ながるる  
紅梅のこぼれし花を頬にあててなどは泣きて小雨ふる朝  
わが歌の反古ぞと聞きて裂きもやらぬなさをひとり君に見しかな

獨立協會員と京城に議る事ありて

西の海に荒汐さわぐ荒汐に眞梶とる子はたゞ我らのみ

竹籜たかやぶのくらしこみちに注繩しづなはりて入ること無用妖怪むようわいての棲むと云ふ

濱に出でて酒に饗あはする飯章魚いだしこのあまきといづれ君を送る歌

草餅に柳をそへて文にいふ都は彼岸ざくらなるべし

ままことの客もあるじも寐入はててたばねし花に蝶二つ舞ふ

ねたる兒の學校服のかくしより董すみたこぼれ出でぬ年は八つと云ふ

春あさき道灌山の一つ茶屋に餅くふ書生袴つけたり

梅さきぬと郡守三頭の驢を送るいざ此國の服つけて往かむ

韓妓江陵

ときいろの長さからぎぬかき垂れて城のひがしに花を見しかな  
あやぎぬに玉をかされる花輿はあれどもふたり月に歩まむ



月もよし一夜を千夜にかたらはむ花の胡蝶の夢の世の中  
 君まちて立ちつる驢馬やいさみけむ庭にちりしく芍薬の花  
 長き日を君が鸚鵡はかたれども日本ことばをいかに解けとか  
 うれしきをやまと言葉になさけとや怨むてゝるは何と云ふらむ  
 君がとる日本刀は手弱女のそのなさけさへ斷つと云はずや  
 けふりかたながむる窓の薄紗うすぎぬに月はかゝりて花の香ぞする  
 天にあらば共にと人の契りしも斯かるしづけき月夜なりけむ  
 立つ名をばいかにぞ人の厭ふらむもどかれてこそあはれなりけん  
 夢に行きて踏まぬ夜もなし山里のこゝしき岩は砂とならずや  
 秋風に一葉ぞもれる我ならば怨みくゝて枯れはてましを  
 長き日を琴にも倦みて牡丹ちるうしろの庭をめぐり見し哉

あてがれて月にねられぬ友ならむ夜よるゆく袖に白き蝶よる

松が枝にかけたる袈裟ぞぬれにける山に入りしはしばしと思ふに

富士の根は神代の雪に瘦せ瘦せて我等を吹く大あらしの風

立つ春をつばさにしめて荒鷺もねぐらの雪や今朝けさはらふらむ

世の上をおもひまどひてなげくときしばしきて聞く磯の松風

あすよりは昔の友になりぬべし立たまく惜しき松の蔭かな

世をいとふ我にはあらず天地を戀ふるなさけの深しとも云はむ

(以上覆寺にて)



石を抱いて歌ふもをかし秋かせや今の世たれか斯かる骨ある

みやびをの詩筆は花に埋むべし往くべきものか彼山のあひだ

おのづから此世はをかしいくたびか君を泣かせて君が詩を鍊る (月枝君に)

たまくらに詩をぬすむべし鬼はよれど我おとろへぬ逐はむ力なし

君におくる古刀七尺つねになでて忘るな雄々し日本の一人

地を斫つて劍を舞ふ王郎梅を嗅いで酒に注ぐ劉令雪寒からず (安齋源と別る)

原町の鴨脚の老木さむき夜に成りけむ君が明星の歌

世の中をゆするも雄々しいかづちの山裂くちから君が歌にあり (楮之吉君に)

あをぐもの彼世は知らずここにありて我ぞ先づ聴く君が秘め歌

蘭の香を病の床にうつさせてねながら書くや春を送る歌 (薰園病む)

菰にねてやがて夢より死なばやと思ふ夜もある橋の上の霜 (乞見)

宵に誰が泣きて立ちたる跡ならむのこる扇に螢やどれる

右の手をとどめて見れば青桐にあま蛙なきて雨横に降る



○ 稻妻は盧山のおもて半みせてやがて消えゆく夕雲の上に

○ 秦や楚や懐古の歌は我も能くす老いたる國は誰が教へむ (長風の清國に行くを送る)

○ おほかたの筆とる人のおもはざる千さとの旅に君は往くらむ

○ 紅筆べにぞでに戀の歌かく人多き世を救ふ筆は君に望まむ

○ ひとしほの尊きほども知らるべし外より見たる大八洲國おほやしまくに (池邊氏の佛國へ行き給ふに)

○ 世の春に知られぬほどや難からむ雪まの梅をおもひこそやれ

○ もえかへる心おさへてかう山の雪にながむる我身なり (京城より淺香社の同人へとて)

官妓玉梅

梅が枝の雪のしづくに紅ときてこの筆君がなさけ歌はむ

友某を斷えける時

世の中にただ月花つきはなの友ならばかかる悲しき別すべしや

○ へつらひて交らざりしことのみぞ別れて後もうれしかるらむ

○ 風ふけば秋さく蘭のぬけ出でて高きにはひをいかがつつまむ

○ わが戀は世にはばからぬ沖に立つたはれの島のたはれはてばや

○ みだれ立つ荒岩の上に涙かけて驚なく磯を吹くあらしかな

○ たをやめのなさはけは知らず加茂川の薄月夜こそ身にはしみぬれ

○ よき人のかざしの珠やぬけいでし祇園の花の春の夜の月



○ おほかたの花の上ふく春かさを柳ひと木にまかせてしがな

○ 曇るらし船なかへして磯にねて松の雨をもひと夜きかずや

○ 蘆ちりて雁なく水の薄月夜かかる夕に君と別るる

○ くれ竹の伏見の里にあらねどもあなう一夜をかりにくる人

○ たちかへり汲まむとすれば下したにかれて野中の清水もとの心なし

○ いとふまにやがても霜となりぬべし君が釵かざしの花の上の露

薄墨は心の染まぬものなれば君が紅筆べにふでわれにかさなむ

○ さらさらばそのつれなさをなさけにてわが戀ぢから猶ためしみむ

○ おもしろき夜あけの月に蛸壺をさぐれば海月くらげ一つうかびをる

○ 龍たつのふるく栖むと云ふなる青淵あをぶらに鱗うろこをながす夏の夜の月

○ 三椀ひやせりの冷麥を且つ我に強ひて建長寺の僧禪をかたらず

○ 月の夜を小督の墓の籤かげになにごととなく泣き明しける



山あひの日かげみどりに繪のごとき青田の上を驚むれて飛ぶ

元 旦

わか水にうちむかひたるこゝちこそ嬉しき年の始なりけん  
けふと云へば硯の水も若からし千代とや書かむふた親のため

地獄の何もあくと云ふ日に地震のありければ

ことわりや底つ磐根にゆきとほり那落もゆらく春の初風

○ 花の香にしらぬ傘さへしたはれて都大路は春風ぞふく

田一枚すみれつばなにうちまかせ蝶のうたよむ春雨のそら

春雨のしづくそほちてかへるべき夕の花に日かげさすなり

二子山あはれぞまさる春の夜は月のかささて花かづらせり

けぶりかと覺ゆる窓のうすぎぬに月はかゝりて花の香ぞする

酒ずきの翁のかばね埋めたる昔の谷に梅さきにけり

膝をりて袖にうけばや三吉野のみささぎの上にもちるさくら花

一莖雙花の牡丹いとめづらしければ

○ 月の御座日の御座としもしうへはや春のみかどの大よし所

○ 柿の實のあかき木するゑに霜みえてもすなく朝の寒くもあるかな

○ たよりあらば大宮人の歌さかむ御庭の梅はいかがにはへる (京城より御歌所の坂正臣の君に)

○ 愛らしきこつばりの跡たづねばや白すみれさく池のまはりに (人の子の思に)

○ 裂きすてし一つの袈裟に光明さし佛は二ついでましにけり (袈裟女)



○ 遼東の雪のいくさにながらへて老いて田を鋤く太郎作が馬

○ わか尼の筆のすさびに泣かれけり世をすてのち花を惜む歌

○ 大鐘のしづめる海に雲あれて龍の涙の雨こぼれさぬ

安寧珠を懐ふ

劍に泣き酒に笑ひしからくにの益荒夫これと今語るらむ

おのが國おのが道にといたつきて昔のちぎりいかで忘れむ

からにして我いはをしもあやまちも知れるは一人君にぞありける

むかし師の浅香社にさむらひしほど、風こゝちにて

惱ましうおはしける夜

みまくらに菊のきせわた打かさぬ藤袴してまもる夜半哉

大日本史を讀みけるとき菊の花をみて

たとへなば牡丹は北のみかどにて菊はみなみの御末ならまし

○ とめかねてよよと泣かれぬ世の中はともかくにも口惜しきかな

(以上廿八年より廿二年への作)

畫 賛

絹笠に霞を繡ひて

玉櫛に月をば挿し

姉ぎみの梅はけだかく



乙姫おとひめのさくらは優やさし  
おくれじと艶にほひ競あひて  
しろがねのまばゆき庭に  
銅橋かたはしのかかれる水みぎは  
瓊琴たまこのさこゆる簾すかけ  
長閑ながいそなる春はの粧けいは成なりりにけるかな

(廿八年の作)

戲 贈

すだれにのぼる花の影  
花にうつろふ鳥のこゑ

すたれあぐるもものうきに  
なにしか臙脂べにの筆ふでとらむ  
柳をめぐるそらだきの  
煙としづむものおもひ  
酔よひの名残なごりのうすあかき  
片頬かたほに鬢かみのはつれかな  
われから切れし琴の音に  
おどろきて立つ蝶ちょうひとつ

(三十一年作)



寒月孤影

錦の窓のたきものは、  
紫蘭にむせぶ秋の風、  
青き簾のともし火は、  
若葉にかをる夏の月。  
たぐらば指もそみぬべき、  
緑の髪なげの丈ばかり、  
簾の裾にこぼれいで、  
あゝなつかしの君が影。

玉の御園の秋の夜に、  
ふたゝび君をかいま見て、  
おぼろ月夜の花かげに、  
花の夢見るこゝちかな。  
愛の御神のくちびるに、  
似たれど桃はいやしげに、  
慈悲の菩薩のまなざしに、  
似たれど梨はさびしげに。  
塵にけがれし人の目に、  
宿して見むははゝかれど、



よろづの花のある中に、  
ひと木氣高き山ざくら。

雪かと思れば玉よりも、  
涼しきひかり花びらに、  
雲かと思れば風ならで、  
えならぬ匂ひ木の間より。

山にうつせば三吉野の、  
山より外によき山は、  
川にうつせば嵯峨野ゆく、  
川より外によき川は。

庭にうつせば九重の、  
玉の御階みはしに衛士がたく、  
篝火かすむ朝ぼらけ、  
御前の簾ゆらぐ時。

谷にうつせば世をさけて、  
入りにし人の柴の戸に、  
笛の音かをる夕まぐれ、  
空より鶴のかへる時。

あゝ蝶ならばその花に、



鶯ならばその枝に、

いかにかはせむ人の身の、  
たゞあてがれて年ごろを。

あゝうたゝねの夢ならば、

もとの現にとくかへれ、  
袂にのこるうつり香を、  
せめていとしき思出に。

あゝうたゝねの夢ならば、

もとの現にとくかへれ、  
まぼろしに見る係を、

せめてうれしき形見にて。

梧の木すゑに秋の夜の、

月はいよゝ／＼澄みゆけど、  
我はおぼろの花かげに、  
なほも夢見るこゝろ哉。

雁が音さえて袖に霜、

さむさ覚ゆるあけがたに、  
桐のひと葉を拾ひ上げて、  
この歌をこそ泣きながら。

(三十年十月作)



梅 花

和尚いはく、  
豎子雜念を去つて、  
眼を閉ぢて物を見よ、  
耳を掩うて聲を聴け。  
玲瓏として玉か月か、  
一物躍つて胸に入らむ。  
啾啾として笛か簫か、  
一聲曳いて空に在り。

婆子いはく。  
若いに禪なぞお休なさい、  
お怖やく三十棒、  
あつたら美顔かほに穴があく、  
それよりや梅の花ざかり、  
澁茶お一つ召し上れ。

(三十年二月作)

ひと夜語

繪 師

朝のきぬに残せし興は水よ問ふな秋にえ堪へぬ色なき百里 (晶子)



若き僧

もみぢ葉に塔の入り日よ何の寺さびしや鐘の水渡りくる (鐵幹)

若き尼

尼そぎのうなじせめてもまさ給へ夕大川に面をむくる子 (晶子)

少女

河越すに紅の脚胖の紐を細き母が負はせし秋の日傘よ (鐵幹)

詩人

ここもまた知らぬ國なる我とこえ寂しの水に人の名よびぬ (紫袖)

牧者

またも暮れぬみぎはの宵を行くは誰が子しばしを我の笛に笑ますや (紫袖)

女

二十はたらびとたそがれ秋を水に見るに倚らむの袖の人なき旅や (晶子)

うらぶれ男

秋の江や樓百丈の夢よいづこかくても我の旅の姿か (紫袖)

尼より詩人へ

よびますは昨日に古りし名ならずや御歌に引けな墨染の袖 (鐵幹)

女より僧へ

江の西の鐘にいたみの僧の君こなたむかずや我に日暮るる (晶子)

繪師より少女へ

ここしばし我に許すの絹たまへ負へる日傘に母はこもらじ (紫袖)

僧より女へ

うつくしき髪のみだれよ何の綱ゆるせ菩提の鹿は幼き (鐵幹)

うらぶれ男より尼へ

いとせめて寂びしとのみによりたまへみぐし丈なる昨日とも見む (紫袖)



牧者より少女へ

その一人きのおも見つれゆきすりのすさびど少女繪に片笑むな (鐵幹)

少女より繪師へ

染めむただち御筆洗ふの大河の夕にゆるす絹の名知らぬ (晶子)

牧者より若き尼へ

思ひ出の笛のすさびど堪へがたき許せ行く君母に似たるよ (紫袖)

少女より詩人へ

ちさき身のただ母戀ふる旅路なりゆふべ都の歌をしへませ (鐵幹)

詩人より女へ

みだれ髪夕眉ほそき君と見て西五十里に呼びし名ゆるせ (晶子)

繪師

ひかり追ひて天なる皇子にまみゆべき藝術よなどか人にふさはぬ (紫袖)

女より詩人へ

額たれて人よる柳五十里の遠の人名を聞かむるにしか (晶子)

詩人より女へ

われ歌びとなれし獨りのそぞろ言よ大河北へいざ船よばむ (鐵幹)

尼よりうらぶれ男へ

人の里の残り香さけの袖屏風供物奉じの旅に用なき (晶子)

尼より牧者へ

牧びとの若きに過ぎし母を泣くか御經たむけむわれ有縁の身 (鐵幹)

女より詩人へ

その袖になさけは呼ばじ河越の夕ばかりを伴ひたまへ (晶子)

牧者

さらばとも笛にえ堪へぬ思ひなり河越す人よ幸きく行き行け (紫袖)



尼より繪師へ

紫に佛いますすはかの雲かあらずと船にこゑひくき君 (晶子)

うらぶれ男より繪師へ

繪師の君供物奉じの旅を見つやかぐるき袖のおごりを見つや (鐵幹)

詩人より少女へ

船歌にかさむは惜しの君と倚りて掩ひて水に袖はこらむか (晶子)

少女より僧に

母びとに教へられつる亡き父の京と聞きもしうら懐かしき (紫袖)

僧より少女へ

なにしかも郷はおなじの我なるをただにたよわの汝とのみ見し (紫袖)

少女よりうらぶれ男へ

許したまへ晝の驛の酔の名残水まゐらすに小さき掌 (晶子)

渡守

遠峰の雲のはためきさても白き今宵の西も雨となるらむ (紫袖)

女より渡守へ

なに棹に君たゆたふや天も地もなさけの雨と成れなの今宵 (晶子)

うらぶれ男より僧へ

ここもまた聖いませる世ならむに君しばらくのゑにしかさずや (紫袖)

繪師より尼へ

引接の御袖にすがる子の一人あやふし共に船おり給へ (鐵幹)

僧よりうらぶれ男へ

『この子あはれ』京なる母の夢ぞ多き君はた共に宿たまはずや (紫袖)

少女

受けまつるこの八つ口の紅小旅のなさけの兄弟達よ (鐵幹)



宿のあるじ

うつつ身の闇に入りぬる恐あらむしづかに今日の宿とり給へ (紫袖)

宿の女

引きし袖糸にしは浅き水に脚胖先づ解く僧の夜目うつくしき (晶子)

うらぶれ男

昨日見し春のうてなのかくこそは我に旅寝のこの宿りとや (紫袖)

詩人より宿の女へ

われ旅にこころ三月の痛手負ひぬ一夜の宿に歌は強ひざれ (紫袖)

尼

あかき灯にあなたおとなしの人のむれ樽に誦せずや戀の題目 (鐵幹)

宿の女よりうらぶれ男へ

おどりますか何に昨日の宿を説く枕にしろきかひな知らぬ子 (晶子)

うらぶれ男より宿の女へ

枕なき我にこの旅年を経ね榮とや子とや白き手いづこ (紫袖)

女より詩人へ

敢てからし西五十里の人の夢を呼びしかひなと明日君に見む (晶子)

宿の女より繪師へ

たまはずや絹にゑんじの夜のかをり壁によります御肩の瘦よ (鐵幹)

うらぶれ男より僧へ

まゐる酒に火かけまさりの僧ぞわかき宿の子もてこ朱の小枕 (紫袖)

僧より宿の女へ

供ならぬ灯うつる酒を今宵得ぬいつの現か緇素別説きし (晶子)

詩人

ひがし西いづれ五十里わかちわかす今日見し一人明日に定めむ (鐵幹)



少女

壁にむきてかざしの芙蓉何の榮わが夜の室の風うつなき (晶子)

詩人より繪師へ

聞きたまへおなじはこりの世に出でて君と二人の胸やすからぬ (紫袖)

繪師より詩人へ

さはいへど君にひと夜の戀がたりあらぬまどひも絹に無き我れ (紫袖)

うらぶれ男より繪師へ

繪師の君明日の御絹の尼が紅を袖に秘むるは罪にやはあらぬ (晶子)

女

君歌びと快樂に時は説きますすな衣の何色宵曉の神 (晶子)

うらぶれ男

明日も我れおなじ旅寢に笑まむ身ぞ昨日の春を酒に往なせじ (紫袖)

宿の女

さらば御僧瑠璃の浄土の春の千とせてよひ假りこし手枕よ君 (鐵幹)

少女

うつつなまどひをさなき一人子の夢いたはらむ母もなき宿 (紫袖)

夜の御神

八つの歌に許し盡しの夜の袖ひくに匂ひの今満つる室 (晶子)

詩人

河の洲に朝霜見ゆる宿の別れ日記の千とせに點うたしめよ (鐵幹)

女

ひと夜子に朝かせ秋の興ありな御僧わかうど戸に笑みたまへ (晶子)

繪師

濃かりきの後のもどきは絹に悔いじ一夜も天の繪の具なるもの (鐵幹)



尼

宿の壁に定離ぢやうりの文字の細いかな天の芙蓉の紅ときし君 (晶子)

うらぶれ男

秋かせに巨の錦の車たまへ載せて歸らむ子らのまばゆき (鐵幹)

少女

踏むをに小草紅絹せうきんの草鞋もかろからじ力ある血を胸に得し今朝 (晶子)

僧

赤き軸しんに七とせ何の信しんや行ぎやうや微妙みまうの功德人に忘れし (鐵幹)

宿の女

暮れば更に來むを迎への經のこせ聲わかかりしひと夜の君よ (晶子)

(以上三十四年八月廿三日夕即興の作)

高麗舊都歌

(三十一年秋の作)

漢城を西に去る十七里、京畿道の開城府(一名松都)は前朝の舊都也。丁酉の秋、われ獨立協會の安寧洙君と共に行き、府豪洪某の家に駐すること三拾餘日。地勢はわが西京に似て狭く、都市は今の漢城に似て小也。松岳山はわれの比叡、この國の北漢山に比すべきもの。王宮満月臺は、その東麓にあり。殘墟遺礎、依然として存す。虫聲、野花と亂れ、驢影、夕陽と寒し。秋風荒涼の景、萬里憑吊の客をして、覺えず泣下らしむ、諸陵多く近郊にあり。荒廢に歸せざるなし、古寺また近郊に多し、諸王、佛に溺れたるの跡を見るべし。城の北に小渠あり、一石橋を架す。漢城の水標橋に酷似す、善竹橋の銘あり。橋上に五百年前の血痕を認む。謂ふ圃隱先生、義に死するの血と、圃隱は高麗の滅亡史に於ける文々山也。姓は鄭、名は夢周、官は宰相にいたる。忠節大義の人、博學にして、特に詩文を能く



す。圃隱はその號、圃隱詩集一卷、我國にも行はる。倭寇禁滅の訴願使として、太宰府に来れることありし也。高麗の亡びんとするや、圃隱ひとり大節を持って降らず。賊因つて一力士を善竹橋下に伏せて、圃隱の過ぐるを要し、刺して瘞す。橋の北に圃隱先生成義々碑あり、悉さに當年の事を勒せり。是れ前朝の遺民、圃隱の義に感激する者の建てしなりと云ふ。開城の俗、佛教を敬して、葬祭に厚く風流華奢を愛して、詩琴絃歌に巧なり、女子に汚穢多く、食膳に珍羞多し、前朝の遺風を存したる也。作る所の「高麗舊都歌」左にその十七首を録す。

安寧洙君と満月臺の跡を吊ひて携へたる燒酎を打そゞぎ、目を閉ぢて「高麗諸王の靈ねがはくば饗けよ」と高らかに唱へたるも最と古代めきて悲し

こきしらの千とせを酒にとぶらひて誰かは泣かんあはれ末の世  
さればかく悲しき跡を歌ふべく海を越へても我は來にけり

涙をば矢立にうけて書きにけり城のくづれに二人泣きぬと  
そのかみの忌垣の石はこのれるを民のこゝろやくづれはてけむ

開城にといまりびけるほどによめる歌

みやびとの玉の小琴にかよひけむその世は夢の松かせぞ吹く  
いにしへの黄金の鞍のかけ絶えてみやて大路は驢馬ぞなくなる  
望月のおもひあがりし夢までは佛の鐘もさまさりけむ  
なきのちの玉の床とて何かせん二十四陵はたい雨と風  
もみぢ葉に月はてれども歌めして御酒たまはらむ御代にあらねば  
宮人の誰かあはれをかしのぶらむのこる釵の鈴虫のこる  
歌おもふやまとをのこは秋風のさむき都に三十日ぬにけり

日本の文明も斯かる國より輸入せられし時代やありけむ  
など思ひつゝけて



一たびは富士の雪をもてらしけむこまの都のもち月のかけ

善竹橋に鄭夢周を忍びて

もみぢ葉のからの錦にしき島の櫻がさむやまばゆかりけむ

菅原のおとゝの筆に似たる哉真心こもる君がから歌

湊川ちりしさくらもしのばれておなじ恨みのから藍の花

まごゝろは石に入りてやのこるらむ千とせの血しは昔もむすばず

から橋のむかしのうらみたづぬればのこる血汐に秋の雨ふる

澁谷日記

(三十四年作)

(一)

武藏野に沿へる澁谷の里すまひ、こころ秋に候。

日ぐらしの聲稀になりて、蟋蟀、くつわ虫、まつ虫など啼き初め候。

わが庭のさま少し書かばやと思ひ候。

垣の朝顔、おそく植ゑたれば今盛りに候。紅き紫、水色、えんじ、ましろ、何れも人

の百二十里西より、いまだ苗のほどに、小包郵便にて送りこしに候。送りこしぬし、

いまこゝにその花ながめて、朝髪とく人思ひ給へ。垣一面にひろごりたれば、青地の

錦に、様々彩ある繡ひ花、露ひと朝毎の光をかしく候。

歌筆、繪筆もちて寄る數多の子等の、土産にと呉れし百合、紅百合、葉鶏頭、女郎

花、桔梗、櫻草、床夏、秋海棠、向日葵、芙蓉、紅蜀葵など、二つの椽をめぐりて芳

を競ひ候。宛らその子等の秀才のにはひと推計り給へ。

野分めく風立ち候この頃、われ花の上氣づかふまでの心に成り候。大人しく成りしと

にはあらず、田舎くさく成り候にこそ、されば近頃の歌も鄙振に候。

武藏野に竹椽つけし片びさし槐樹ふたもと秋の富士濃き、



武藏野にとる手たよげの草月夜かくてもつよく京を出できや

たすきして人馬盟に流れ汲む里の小百合の宵薄月

露の戸を結梗にあふる人の小袂三月里居の朝道遙よ

宵月に米つく音の家いづこ薄の小川すゑ遠白き (以上鐵幹)

人瘦せて色なき髪のみだれ髪澁谷の秋を歌とひますな

目のはての櫓の片富士露の秋武藏にひろき四つの袂や (以上晶子)

(二)

知りおはずや紅蜀葵、のみを挿簪かざしの昨日けふ一昨日に候。白きがおはず芙蓉、この子にふさひ知らずと許し給はぬなさけ、憎しやと側目そばめする子に、さらば一つに、大人らしくなるやとの一人の君、無理に候かな。

月に武藏野ゆきし昨夜を知りおはずや、氷川の社の後ろ、その原、そは廣きく處、かなた一簇、こなた一簇、岡、森、まこと畫のやうの夜なりしと知り給へ。その人に

憂ひむゑにし負へるべし唯だ假初や上田のひと夜、節とり給ひし人を誰とは問ひ給はじ。いと佳しと思ひ候ひき、その作者こゝにあらば、我れ袖とりて放つまじと、さは嫉みもち給はぬ君に囁き候ひしよ。その月に抱きて入らむ河の、そこに無かりしを知り給へ。

書きさして、この人、人に促されて、人にそひて、半込まで出でこしと知り給へ。江戸川の水に若きはこりの影、さいへ美しと君見たまひしなるべし。早稲田に先づ醉茗の君を訪ひ候。表には裏には、木立くらき宿、初秋さては然ぞなの一人住と、早はかりし給ふな。光ある二人の君、兄君、姉君との我に候。傍らに今一人人のありしを、君よ忘れ給ふな。そこより矢來町より二町ばかりに候。矢來町とは君、登美子の君すみおはす處よ、今日は慌だしの、まこと慌だしの、別れ笑みにておはしき。鳩守なる人の、二羽一羽、今のこりなく亡せしと、語り候ひし。 (以上晶子)

桐くだけで五彩の鳥を山に見ず秋かせ我を起す子の無き



武藏野に亂れ興がる秋の鬢人よこの朝なに花つまむ (以上鐵幹)

紅芙蓉その朝の野の前髪のの優しかりきなどの君の君

ゑんじ色に昨日は知らぬ歌のもだえ榮はなの火かかげの美しの宵 (以上晶子)

頻にもひとり覺ゆる今日の榮はなぞ人よ東に秋は説かざれ

覺めな夢の今宵はてなき秀才すざいなりこもるこの宿光明に閉ぢよ (以上紫種) (九月四日)

(三)

藤澤に下りしは夜の九時、宵闇の、星も見えぬまで曇りたり。片瀬に車おりて、汐あひの眞砂路、かして火の見ゆるは江の島、案内の男の小提灯、海かせにまたゝきて、従ふ二人の足おと、なにやら夢をたどるやう、橋の上を危しと手に倚りし人、まこと我も危く、浪は脚下に激して、百の白き馬互に噛みぬ。

欄に立ちて、めざめ給へ、あれ仰ぎ給への夜中の月、たゞ相摸灘は綿のべたる如さにその人の聲の細う清かりしとのみ、我その外を何も覺えず、起き出でしは恵比壽の樓

旭の間。

假初の朝撫髪、はつれ氣にせぬも嬌ある子、神とがめまさは、一日を島の蜚少女、かづきは知らず、おわびには歌よみて奉らむ。揃ひの浴衣、袂の短さ、これのみは耻しけれと逢ふ人もなき朝ありき、邊津宮、中津宮、奥津宮、いはれを聽けば、所がら、露骨なる二人の姿も古代めかすや。松の火けして巖窟出づるとき、美しいかな戀の世の朝あけ、我れ君が前の手力雄と笑みしは誰。

四人の蛭の、骨たくましく、肌の色黄金とやう、渦くま稚兒が淵に、立ちかわり躍り入りて、捕へこしは鮑、さざね、伊勢海老。

松六七本、斷崖おそろしき掛茶屋、右に富士、前に箱根、左に伊豆の八島。海越に立つ美しき虹の、宛ら長き袖のやう。君、彼のあたりを天城山と見給へ。(以上鐵幹)

濱に見る火かげ一つに人の夢の宵をしばしの欄の子わかき袖の下の一人の夢に秋をもどくそぞろ月夜の浪のおばしま



宵の月朝もどかれの秋の我れ辨財天とぞ夢に化粧ひし (以上晶子)

灯ともして得たる歌なき神の巖窟若江の島はただ戀に引け

立つ虹のかしこ天城の朝の岩二人うつくし涙を出でし今 (以上鐵幹)

(九月七日)

(四)

小ながの夜、秋なるを、鮎賣の若婆が聲に、崩黄蚊帳くぐりて、芙蓉見し人のまなきし、一人の人、猶夢にておはせばこそその羞しの朝、君よやがて夜網の漁不漁、人もどかれまじの睡氣の聲に、問ひし人のありしを知り給へ。

八時には烏水様、醉茗様、おはすなり。青山の花屋が坂までは、二時かゝるべし。紫袖様、山より移し給ひし萩、それ床にとの君に、こゝながら措き給へ、誰やらの歌さゝ給へなの小椽の人、まことは不精な不精な人に候かな。

この頃の柿、門より我が出迎の立關までを、若き詩人の額うなじ、打たざれ、よくくく落つる此頃の柿と、祈られしぬし、醉茗様先づ一人を知り給へ。そこなる土にて、二

葉つくりし朝顔説く人、二日の旅に朝髪やつれしやう、人にはうらどひ、自からは隠なく羞しがる人と知り給へ。涼しかりし涼しかりし天王山の夕の紫紅様をも、強い來たまひし君を、里居の二人、手を拍ちて嬉しと申し候ひき。すすしろのや様、沖の楡疫船より歸り來ますたび、そこ天王山の烏水様の椽より見ゆる屋根の上に、紅き旗だし、信號遊ばすの、由、面白き事と云ひし人を、君よ、誰と笑ひ給ふな。

知りおはすや、こゝの花園、君よ、新詩社にてはおはさず、澁谷橋の下のなのに候そこに紅蜀葵折りて、別れし三人と二人と知り給へ。君よ、夕なり。 (以上晶子)

くれなるの蝶の一つのやりどころ君この朝の罪うつくしき

今日見つれ草野を西へむつまじき二つの傘に母を泣く人 (以上鐵幹)

蚊帳の人に鮎賣かたる萩の椽かたへ嫉みの朝目すすしき

白芙蓉里居ひさしき朝ごちたてぬ雨戸に歌なき髪よ (以上晶子)

(九月八日)

(五)



梟庵訪ひ來る。東京に入つて三日目となり。  
晶子と三人、相顧みて各々境遇の變を云ふ。過去纔に一年、殆ど人生多難の逕路を闊し盡せるかな。

君、大坂、神戸に於ける諸友の近狀を語る。天眠の健康を復せる、溪舟の新人を迎ふるの近き白浪の未だ必ずしも筆を焚かざる、皆喜ぶべし酒骨の前後して、都門に入れる、その得意なるに比して、忠言が寂寥の歎如何ぞや。

君、また余が未見の友秋遊に就て語る。眉目清秀の人、若うして肺を病む、その須磨の客居、常に母を懷ふの筆多しと。晶子もまた眼霑へり葡萄あまからず、梨あわし、田舎貧厨の酒、君を酔はしむるに足らざるを愧づ。(以上鐵幹)

百花園への三人、そひまゐらせの人を、道の泥濘、船の乗り下り、飽くまでの、小さ妹とりなし爲たまふは、梟庵様と知り給へ。後を追ひ給ふことい、餘りに急ぎ給ふが故の、前なる君の御足の早さなり、梟庵様がわろきなりと、隅田堤を拗ねて〜手

をかしやらむの人いなみしは、よその子と思ひ給へな。

蓼と聞き給は、君まづ里川のしやら〜水を思ひ浮べ給ふべし。此の園に作りの其は、まこと高き〜のと知り給へ。梟庵様よりも高き〜蓼、女郎花、紫苑、藤袴は色なき花に候かな。尾花のかた、寧ろ艶めかしう、桔梗の名にも、色々おはすのに候かな。雁來紅は戀する僧の、その寺の庫裡の裏に見るべき色との人、そは梟庵様ならぬ誰、知りおはすべし。(以上晶子)

武藏野に友を迎への秋の二人君知る世ぞと瘦を掩はぬ

江のあなた月は落ちての闇の船昨日水戸に手燭よびし子(以上鐵幹)

みだれ髪はやつれを誇る秋の興よ兄と喚ぶ君昨日を強いな

雲ひくき大川ばたの秋の色戀なき兄を京に迎へぬ(以上晶子)

(九月十日)

(五)

また出で給ふのと知り給へ。今日は酒骨子くべし、その人と遊び居たまへ、午は過ぎ



この人、しばしよ君と、例の呼びかへし參らすこと、今日は然云へ一度なりしは、大人らしくなりし故か、この人わからず候。

蒲原様入らせられぬ。有明の君よ君。こゝなる庭の萩、紫苑に、まじらふさひの眉目  
畫師、旅人、若き僧、抱き給ふおもかげは、伊太利の復興期の御聲、やはらかなる  
君、その泣菫様の「破甕の賦」節とり給ひし時、さは無くてやは魂銷ゆらむの人と、こ  
の人おもひ候ひき。伊太利と云はず、南方の人の血の饒なるを説き給ひし君の御産れ  
は、九州の那處、君ゆるし給へ、この人わすれ候。さらばレモンの花は無くとも、燃  
ゆらむ唇もとめ給ふに難からじ、わかきに何の京みやて、美まし、君行き給はゞの方  
と、其時は梟庵様もおはしき。はしたなく候ひきな。藤村様上り給ひしは去年の秋と  
か。そこに二人の君、淺草の公園めぐり爲給ひしと知り給へ。辻卜者、君興ありと爲  
給はずや。二人の君、机前に立ち給ひしと知り給へ。一人の君、工業家と成り給ふ相  
なり。されど此國にては少さし、外國へ往きて事起し給へとなり。傍の秀才は、水難

の相おはず由、それ船にてと、まがくしく候かな、今は最もしき君と思ひこし給へ。  
四人となりてよりの一人の面に、光の添ひしを燈火つさし故なるべしと、君例のさか  
しらを言ひ給ふな。(以上晶子)

春花になさけ染めたる歌の君を草の武藏の戸にこもらする  
朝の庭に姫日向葵の名を笑みぬ歌には二十眉をさなの人 (以上鐵幹)  
夕柱まち得し人に與へまさで蝶撲つ御袖にくらしの秋  
をさなしの二十姿とのみぞ言ひし秋海棠に昨日見し兄 (以上晶子)

(七)

(九月十二日)

歸り來る者、新に來るもの、都門の新秋は、少年遊學の人を迎ふるに忙はし。  
甚しいかな今の學風の諸君を毒するや。文科大學、すでに教員養成所たり。他の私立  
學校にして、卒業者に、中學、師範學校、高等女學校に教師たるの資格あるを誇らざ  
るもの有りや。その學者先生と稱する者を見るに、自家の學說に何等の創見主張ある



に非ず、學說の研鑽に一生を捧げて富貴も改めざるの信念嗜好あるに非ず、たゞ俸給に衣食せむが爲に東西の學說を取次ぐ一種の商估のみ。諸君の都門に集るや、この下等なる學風に感染せざる者幾人ぞ。

近頃漸く之を慨する少壯學者あり、或はニイツチエの學說を紹介して、天才至上主義を以て物質的文明の無價値を説き、或は美的生活論を草して、今の道學先生の教育なるものが、人生の根本および歸趣の意義に遠かれるを罵れり、これ時弊を照して、諸君の前に投せられたる一大炬火なり。

われは身卑しき詩人なり、此の如きは彼の炯眼達識なる少壯學者に聽くべし、即ちニイツチエの學說の如きはわれの知らざる所。然れども諸君、われは更に此の如きを知れり。詩は今の官私立學校に於て學ぶ能はず。詩は今の中學、師範學校に教師たるの道にあらず。倫理道德の事は強ゆるを得、詩はわれらが一片の駄詩も、猶且今の道學先生の奪ふ能はざる所なり。

食に飢うる者は、路上の走狗も然り。諸君は靈に飢うる者の如何に高きかを知るや。嗚呼今の學風は卑むべし、饒うて餓狗の前に肉を與ふるを見るのみ。

此日學生某君等訪ひ來る。皆、法、醫の學に志す者、餘力を以て文學を研究するは、天資の嗜好に由ると云ふ、これ頗る我心を得たり。共に藤村泣菫氏の詩を評し、栗飯を喫し去る。(以上鐵幹)

不斷の花地にもとむるに日や足らぬ詩歌の人の秋さゝ給へ

秋と見るゑんじの雲のうつろひに顔れ危む天地の夢 (以上晶子)

聖の御親ひがしの子等は耳しひぬ目しひぬ虹に何を讀へむ

くだされし歌に一人のとのだに眉秀でけむ我の昨日よ (以上鐵幹)

(九月十六日)

(八)

西低き槐樹原、月には裏なる此處の夕は、山の下火かげの一つ、星の一つ、眼眸を  
れと見て君つよかれの歌さや、かむの窓、さて猶こなた向かすば、其肩に衣の一重分



ちて、掛けおかむの窓ならむかの、やがてのなさに片笑む人の、移らばあらむ室と  
 知り給へ。母すむ國を向の六疊よ、君。近き庭は小松の庭、楓二本の一本は今深紅の  
 美しきく、さ云へ文に封じむの色は是ならじとに候。襖子の繪の立田川、この人す  
 きと申し候ひし。君が領なるべき東庭は、青きものばかり、色草一つ無しと、袂衣様  
 に囁きて手を拍ちし人、山へ移らば益の小兒に成るのにや、さびし心地のそれ、遂に  
 大人に成り得るのにや。移らば飼はむの山羊は、乳しばると羞しと云ひし人、鶏は昨  
 日目黒にて見し彼程の少さを多く、美しかりし彼色のをと、頻に思ふと知り給へ。  
 北、西に隣なき此家、左方は某男爵様の御邸、この大家様なの由、降り阪は早きく  
 ものに候かな。今住む家までを、百の数かぞへ難しとは、一番さきに着き給ひし君、  
 すこしは君よ、例のと思ひ給へ。その秀才の色と見るべき花草のさまく、之と別れ  
 行かねば成らぬのかと、思ひくするの候 (以上晶子)  
 かたへ嫉かたへ矜の日記の秋武藏の霧に草戸ひらかむ

われこそと歌の硯に下りたち、尊菜の水の手に寒き朝 (以上鐵幹)

朝井の薄にきれし細指の紅絹に差ある火影の今宵

才の人の夕おもかげの草の秋そ、ぐに水の西へ流る、 (以上晶子)

(九)

朝顔の末花小さくなりて、人は單衣を重ね、朝よひ火鉢さへほしさを覺ゆ、野の秋の  
 ふくるは早きなり。

今日活版所に明星十六號の原稿を送りはじむ。中に學士樂山が余に與ふる文、博士井  
 上巽軒を罵つて痛快、學士月杖が余を警しむるの書、直言忌まず、友誼の厚き近時如  
 此は稀、余たるもの知遇の過分に感激せざらむや。

呵軒、梟庵來り訪ふ。共に醫生にして詩を解し、卓を拍つて能く談笑放語す、性格、  
 嗜好、學問、職業、年齒、恰も相似たり。晶子戯れて兩先生のお見舞と云ふ。

余猶明星の原稿を整理するに忙し。梟庵余の爲めに寫字の勞を取り、晶子余に代つて



客を延く。呵軒傍に在つて奇譚百出、人をして倦まざらしむ。

白星葉書を送つて云ふ、文藝復興期は近づけり、好漢鐵幹晶子健在なりや、大に歎喜の聲を擧げよ、と。

汀舟、蘆江、東岳、紫袖等もまた前後して來り訪ふ。汀舟その水彩畫の富士土産十數葉を示す、詩筆畫筆あはせ持するの快如何ぞや。蘆江もまた線畫に妙、羨むべからずや。

今夜梟庵宿れり。子と神戸に相寢ねしは去年の秋に屬す、溪舟、忠宣、洒骨、白浪、琳雨等と酒を擧げて歎語盡さず、聯句の稿紙堆を成せし當夜の清興、ともに忘れ難きを説く。追憶は叙情詩人の命なるかな。

月戸の隙に明く、蟋蟀枕に細る夜なり (以上鐵幹)

京にきて經し世つたなき戀の幸を人に笑む子の秋みる火かけ

富士とびて母すむ國の空を行くよ暮立つ山の果敢な秋雲 (以上晶子)

世の秋に我師わが友つらからず歌には幼な道に笑む今 (鐵幹)

九月廿五日

新派和歌大要 終



明治三十五年六月十五日印刷  
 明治三十五年六月十八日發行

(新派和歌大要)

正價金二十五錢

與謝野鐵幹

東京市神田區鍛冶町十七番地

岩崎鐵次郎

東京市神田區錦町三丁目一番地

日置市二

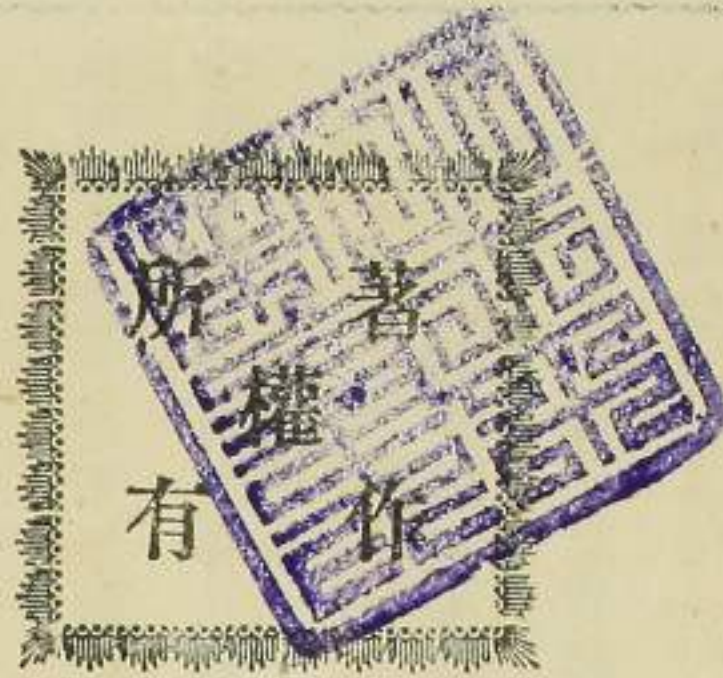
東京市神田區錦町三丁目一番地

小川印刷所

發兌

東京市神田區鍛冶町十七番地  
 電話本局三〇六七番

大學館



著者 發行者 印刷者 印刷所

池田錦水君著

社會各面 三十錢 正價

女心の解剖

次目

緒論	世論	娘女	處女	義女	妻女	職業	風土	年配	容貌	解剖	緒言
婦人	婦人	阿魔	令嬢	令嬢	令嬢	女	關西	少	美人	の順序	
一貫	一貫	後家	女學生	女學生	女學生	女	關東	老	十人	並	
の	の	の	の	の	の	女	山	婆	年	醜	
心	心	心	心	心	心	女	東	年	増	婦	
情	情	情	情	情	情	女	田	造	新	婦	
						女					

墨堤隱士著

岡落葉畫

日本富豪の家

次目

菊池	白木	澁澤	安田	住友	岩崎	本間	鴻池	升本	山本	中澤	大丸	松屋	三井
家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家
の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の	の
家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家	家
憲	憲	憲	憲	憲	憲	憲	憲	憲	憲	憲	憲	憲	憲



葛城天華君著  
岡落葉君畫

正價金廿五錢  
郵税金四錢

### 女義太夫の裏面

(寫真版挿入)

女義太夫の裏面を描きて **周密精**

**細**、諸君はその意外に驚きろの墮落に

愕くべし。

著者多年 **探索の結果**此に本書を

著はして、世を警醒せんとす

附録には、小説的の短篇、**女義太**

**夫の人名表、語物一**

**覽表**を添ふ。

一ノ二

原田東風君著  
岡落葉君畫

正價廿五錢  
郵税金四錢

### 社會の裏面 乞食

乞食とは何ぞ **最下級**に位する

や、生活程度の **遊民**なり、社會の風教上最も忌むべ

り、而も、一團體をなして活動せり、一な

等の **戀愛**あり、婚 **教育**あり、道

間に **交際**あり、階級と

生活の狀態は如何、其始めてとろの終り

は如何、不具廢疾 **放蕩墮落**の然

め、然らし乎、**不幸災害**の然らしめし乎、

か、**不**、老と幼と男と女との比較如何、

と、**實地踏査**の後に成る

親しく、**實地踏査**ものなり。

長田偶得君著  
岡落葉君密畫

### 三逸事 明治六十大臣

正價三十錢 郵税四錢

明治十八年内閣の改革以來大臣の職に上

つた **總計六十人**者例の健筆

を揮つて **大禮服**と **拔**つた **眞**

**裸其儘**の所を描く **抱腹絶**

**倒**

岩崎徂堂君著  
岡落葉君密畫

### 三版 中江兆民奇行譚

肖像筆蹟挿入 正價廿五錢 郵税四錢

兆民居 **一世の奇才**なり、奇言

士は **不治の病**に罹つて病

奇行世を駭し、舌鋒劍の如く活動雷の如

し、嗚呼此 **奇言奇行**を蒐め以てこ

居士が **奇言奇行**れを劄劄に附

するは聊か、著者の感する所あればな

一ノ三



原田東風著 岡落葉畫

### 暗黒の青年時代

正價廿五錢 郵稅四錢

恐る可**警告**むべきは青年時代なるかな。悪

### 魔耳に妖鬼

袖を惹く、郷關を出つる時何そその決心の堅

固なるや歸郷果して幾人か錦繡を纏ふ

や、吁、暗黒なる**前途に光明**

は青年時代なり、**一道の活路**を得んとする者先づ本書

を認**準備せよ警戒せよ**、

押川春浪君著 岡落葉君畫

### 空中大飛行艇

世界怪奇譚 第三編

正價廿五錢 郵稅四錢

春浪君の著**愈々出て愈々奇**

なり、「奇人の旅行」は膽豆の如き小人輩を驚かし「世界**碧眼豚尾**の膽を武者修行」は「世界**世界万国**誰か驚

「空中大飛行艇」は**新發明**をやりし**輕**

るものあらんや**軍艦**また必要を見

空中大飛行艇の**氣球**なす**軍艦**す、未來陸戰海戦は正に空中大飛行艇に依る行文流暢記事の快例の如し、

宮崎來城君著

### 鄭成功

正價卅五錢 郵稅四錢

鄭成功は**國姓爺**の名を以て從來稗史小説は日本人に深く記憶せられたり、而かも未だその**完全なる實傳**あるを見ず

宮崎來城先生嘗て**支那臺灣を遊歴**して

**珍奇斬新の材料**を有する

富此に先生、**謹嚴**にして**瑰麗**の筆硯を新にし、**瑰麗**の筆硯を揮つて鄭成功一篇を著さる、これ先生

が**最も苦心の餘**に成るも

著中**好讀本**たるを期せられたり。

生田葵山人著

### 貴族の戀

正價參拾錢 郵稅四錢

生田葵山**思想豊富**にして筆力**青**

葵山氏**年作家中天才**の名あり

貴族の戀一篇は葵山氏か苦心慘憺の作なり、**上流社會の戀愛**を描

り、**運筆極め、妙齡芳顏の一令**

て深刻、**嬢**は二個の紳士を醜弄する所の如き**神**

は描寫心理を發いて妙殆んど**手**

の感あり



岩崎祖堂君著岡落葉君畫

田中正造奇行談

正價廿五錢 郵稅四錢

肖像筆蹟入 (再版)

明治の佐倉宗五郎

誰ぞとは

鑛毒問題

十年一日の如く狂奔 盡瘁せる田中正造翁其

人なり翁が行

動たる總て 熱血の餘に墮

在ては寔

模範たるものあり本書は翁

逸話奇行

近時有益の書なり。寔に

東臺隱士著 岡落葉畫

名士の交際術

正價廿五錢 郵稅四錢

本書は田中正造、佐藤鬼少將、江木衷、北垣男爵、久保田讓、高木辯護士、平岡浩太郎、大隈伯、其他現今有名の人

士に應接間は如何に裝飾、應接

如何に談話するか、訪問し實見したるもの、一讀面目躍如として現し宛然讀者自身名士と談話する感あり、

墨堤隱士著 岡落葉君畫

正價廿五錢 郵稅四錢

明富豪致富時代

果報は

寐て待つと棚の上の

牡丹餅

は自から落ち来らず懐

掌禮拜

して福を得んとす、

不撓不屈

の精神と機敏潤大

上の資産家

と題して富豪附

録

とす。

押川春浪君著 岡落葉君畫

正價廿五錢 郵稅四錢

世界怪奇譚續空中大飛行艇

「空中大飛行艇」を

美人 飛行艇よ雲

漠々

霧濛

一大警報

巴里全市を震駭せしめ

搜索

の間に起る怪事と珍話

大歓迎

局に到つて

の市大飛行艇は、大勝利を博して歸りたり全



蛟龍子編

正價廿五錢  
郵稅四錢

明治卅五年三月調查

男東京學校案内

遊學第一方針は學校へ入學するの性能に應じたる學術を專修するに先づ學校を選択せざる可からず、東都の地學校の數頗る多く千餘に上るべきも、正常なるものは僅に十分の一に過ぎず、これ通學青年の最も考慮せざる可からざる最近の調査を百三十餘校を選みその規則、名稱、試験科目、修業年限等、責任を帯びて記述せるものなり、男女遊學者の爲には無比の案内者無比の良友なり。

井上啞々君著  
岡落葉君畫

正價廿五錢  
郵稅四錢

遊學書生

著者の序文に曰く  
本書を讀んでもし眼を怒らすものあらば幸に墮落の淵に沈むの苦を免る書生さんなる可し  
本書を讀んでもし膽を潰すものあらば幸に可愛息子を臺なしにする厄なき親爺さんなる可し  
もし本書の文の拙なるを嘲り記述足らざるを嘲るものあらばこれ煮ても焼ても喰へぬ奴なりと  
本書は一個無邪氣無垢の青年が東都に遊學中の周囲の汚俗と悪友の誘導に依りて不識不知墮落する傾向を小説的に畫きたるものにて新書生氣質と稱す可き書なり

池田錦水君著  
岡落葉君畫

定價廿五錢  
郵稅四錢

無錢修學

本書の目的は青年が苦學力行を獎勵するに在り、因循姑息の念を除去するに在り、獨立自活の法を教ふるに在り、目次左の如し

- 第一立志郷關を出つ
- 第三屋臺店の喰逃
- 第五就學の失敗
- 第七雪衣大難
- 第九文字を知らぬ大漢學者
- 第十一乞食小僧の貸家捜し
- 第十二糞尿の耻辱
- 第十四托鉢坊主の仲間入
- 第十六無資本の獨立營業
- 第十八車夫生活
- 第二十精神一到何事か成らざる
- 第二巡查を相手に大氣焔
- 第四無錢就職の第一着
- 第六空腹の苦痛
- 第八立ん坊
- 第十天は自ら助くる者を助く
- 第十三托鉢坊主の案内
- 第十五空前絶後の狼狽
- 第十七意外の大珍事
- 第十九暗中の抜刀

附録 學生自活法

池田錦水君著  
小山榮達君畫

定價廿五錢  
郵稅四錢

奥様と嬢様

奥様

嬢様

- 其一 奥様の歴史
- 其二 奥様の理想
- 其三 奥様の嗜好
- 其四 奥様の品性
- 其五 奥様の嗜好
- 其六 奥様の娛樂
- 其七 奥様の滑稽
- 其八 奥様の言語
- 其九 奥様の動作
- 其十 奥様の職務
- 其十一 奥様の社交
- 其十二 奥様に寄す
- 其一 嬢様の歴史
- 其二 嬢様の理想
- 其三 嬢様の嗜好
- 其四 嬢様の品性
- 其五 嬢様の嗜好
- 其六 嬢様の娛樂
- 其七 嬢様の滑稽
- 其八 嬢様の言語
- 其九 嬢様の動作
- 其十 嬢様の職務
- 其十一 嬢様の社交
- 其十二 嬢様に寄す



池田錦水君著  
岡 落葉君畫

正價廿五錢  
郵稅四錢

### 戀の一年有半

(版再)

一年有半に於ける**戀愛**は如何に多  
様に如何に**夢幻**に**人情**の**波**  
**瀾**常なく**浮世**の**轉換**極なきを  
活寫して、讀む者先づ**仙境**に遊ぶの感あ  
り、已にして**涕淚滂沱**禁する能  
はざる可し。  
**戀愛の原書**を知つて、まだそ  
の疑ひあるもの**數多き寫本**の  
中先づ第一に本書を繕いて可なり。

池田錦水君著  
小島冲舟君畫

正價廿錢  
郵稅四錢

### 婦人と戀愛

(版再)

#### 目次

- |           |            |
|-----------|------------|
| 第一 婦人の通有性 | 第二 人生と戀    |
| 第三 戀の發動   | 第四 一時的戀愛   |
| 第五 虚誇的戀愛  | 第六 着實的戀愛   |
| 第七 令夫人の戀  | 第八 細君の戀    |
| 第九 内儀の戀   | 第十 嬢の戀     |
| 第十一 後家の戀  | 第十二 外妾の戀   |
| 第十三 令嬢の戀  | 第十四 女學生の戀  |
| 第十五 町娘の戀  | 第十六 下婢の戀   |
| 第十七 藝妓の戀  | 第十八 娼妓の戀   |
| 第十九 都會と田舎 | 第二十 婦人戀愛慨説 |

原田東風君著 小山榮達君畫  
魔窟叢書第二編

### 木賃宿

正價廿五錢  
郵稅四錢

**社會の暗面**先づ下層の生活を  
研究す **下層の生活**を探らんと  
可し **下層の生活**を欲せばその  
最も適切にして複雑なる木賃宿を観察す  
るを便とす木賃宿の活寫はよく **社會の罪惡**  
**亂調病源**を指摘して餘蘊なから  
に非ず **苦心慘膽の處**唯その  
著者 **苦心慘膽の處**奇警緻  
密なる觀察に止まずして活寫の筆法に存  
する又 **一部の好小説**  
これ

原田東風君著 岡落葉君畫  
魔窟叢書第二編

### 貧民窟

正價廿五錢  
郵稅四錢

**労働問題**、**社會問題**、**風俗宗教**  
等に力を盡しつゝ、あ  
る人士は **貧民窟の現状**に精  
第一に **貧民窟の現状**に精  
ざる可から **空論の喧々**たるに  
ず、從來 **空論の喧々**比して  
これが状態生活を寫したるの書甚だ少し  
著者これを慨し親 **非常の苦心**  
しく其境に臨み **非常の苦心**  
を以て本書を作らる行文極めて趣味あり  
彼の徒らに統計的記實のものと同じの  
比に非ず、



正 價 押川春浪君著  
二十五錢 岡落葉君密畫

第一編 奇人の旅行

世界怪奇譚

郵 税 四 錢  
は彼の 藤栗毛 の中に押込  
錢 九 九 が 栗 毛 の 中 に 押 込  
らる可し

奇人の旅行は世界怪奇譚の第一編として顯旅行の趣味は千變万化にあり之に配するに奇人を以てす故に如何に本書が意表に出づる記事を以て満たされたるかを知らしめたいは彼の本書一度世に出だされたらんに

押川春浪君著  
岡落葉君密畫

第二編 世界武者修行

正價廿五錢 郵税四錢

一丈夫 金剛の如意棒を掲げあり剛勇を顯 黄金と見ること 蘇生の道を得、世界貧者弱者、碧眼の膽み豚尾の如く、眼眩く、讀去り讀み來り痛快壯絶 眞正の大和魂を發輝して 偽文明を罵倒するもは本書なり

駿臺隱士著

學生座右叢書第一編 最近記憶法

正價廿錢 郵税四錢

記憶力と理解力 力とは修原素なり、而年齢の増加とも記憶力は

反比例の傾向を有す、畢竟修練缺乏の結果なりとす著者從來の経験と苦心の結果

實用に最近の方式を採り極め適せる文字を以て書かれたるもの即ち本書なり

涵養社編纂

學生座右叢書第二編 新式勉學要訣

正價廿五錢 郵税四錢

本書は勉學の要訣を新式と取り中

最良の参考書たるを期した

漢文等 普通學の最要科

博士學士等皆方今 大家



木村鷹太郎君著

パイ文界の大魔王

正價四  
十錢郵  
税六錢

色刷寫真版數葉挿入

本書はパイ  
ロン卿が 幼時より終焉に  
るの生涯次を逐  
うて精細その

性格の戀愛の  
文字の思想悉く叙説し評隲し眼光

炬の如く筆勢火の如し狂熱詩人が  
面貌活躍して、吾

人が面前に髣髴たらんとす寔に寂寞たる  
文壇 一道の活氣を興へたるも  
のと言ふ可し

と稱す可し、

與謝野鐵幹君著

新派和歌大要

正價廿五錢  
郵税四錢

本書は鐵幹君が多年の間初學者の爲め、

親切叮嚀を旨と註釋、評

論、説話せられたるすべて新派和

歌に關する著作を蒐録  
したるもの、實に歌壇の

珍

駿臺隱士著

學生坐右叢書第三編  
學生讀書法

正價廿錢  
郵税四錢

讀書を  
するに 坊主が經と讀む様で

萬卷何の益もない殊に今日の様に著書が  
數限りがない状態では殊に讀書の法を知

らな 時間と費用に計る可ら  
ざる損害を

蒙るのである依て苟も忠實なる考をもつ  
た學生は讀書  
法を會得して 方針を誤らぬ

様にせねばならぬ

東福寺管長濟門契沖禪師題  
近藤嘉三君著

魔術長生法

題目靈妙不可思議と言ふ人  
然るも 未だ道破せざる所

何人も 未だ道破せざる所  
ればなり 虚誕無稽婦女子の眼を  
瞞するもの

非すか の 虚誕無稽婦女子の眼を  
瞞するもの

凡て 心理と基礎着實穩健  
として説述

功果顯然たるものなり試に目次  
の二三を摘記すれば

長生の秘訣不死の高僧の  
人心の靈  
的作用 心的療病

法 等二十餘箇條  
長生を冀ふの人必讀の書なりとす



早田玄洞君著

### 臨終の一日

正價廿五錢  
郵税四錢

本書は臨終の際に於ける**英雄豪傑**君子**美人**

**人烈婦**を描きたるもの、**平常**

の**覺悟**は臨終の際によつて解決せ

るものなり、本書を讀む

も**豁然大悟**すべきは疑ふ可きに

非ず一部の**小傳**と見

做すも可なり、蓋し**精神修養上**必須の

早田玄洞君著岡落葉君畫

### 膽力修行

正價廿五錢  
郵税四錢

語に曰く**心は小**なる可し、**膽は大**なる

可しと、**膽力**を養成せざれば、**優勝劣敗**の世界

其名を揚げ其果を收むる**妖怪**を探

**險山**を攀り、**幽靈**を觀破する等**小説**

的の**經歷談**の筆を以て描かれ

たる、**一讀二嘆**蓋し巻を掩ふ能はざる可し

宮崎來城君著

### 名流叢談

#### 第一編 苦學談

正價二十錢  
郵税四錢

**苦學十年**始めて一家を成す可し

し天下に榮譽を得るもの孰れか**苦學**の結

果ならざらんや

來城氏が**健筆富想**天下悉く敬服する

苦心の餘に成り**青年**と**益**計る可

からざらんとす

涵養社編纂

### 現代青年の憲法

正價廿錢  
郵税四錢

如何に**成效**す可き乎これ満

世は**青年**が日夜焦慮する問題なりとすこれ

が秘訣を知らんと極めて空漠攫む所なく

半途學を廢するの悲運に了るは何ぞやこ

れを要する**精神**を措**形式**を學べ

に彼等は**此等**の弊を拯ふて**青年**

の**福音**たるを得可き乎輯むる所嘉

文彦、島田三郎、横井時雄、三宅雪嶺、

井上哲次郎、大隈重信、志賀重昂、加藤弘

之、陸等**青年教育**熱心なる人々

實、等談叢なり







編九第話叢傑豪

著君城來崎宮

傑豪の情多續

正價廿五錢  
郵稅四錢

瑰奇にして而かも優艶な  
る筆致に富める宮崎來城  
君に多情の豪傑  
一篇を出た世の讀  
して大に驚かす  
書界を驚かすは江此  
の聲に促かされて更に其  
洩れ戦國の猛將  
たる勇士が情事を寫  
戟と紅粉、甲劍將  
冑と彩衣、如何に  
の人をして恍惚たらしむ  
よ、炯眼と柳眉、  
廣額と花顔、  
に其の光景の人をして  
た恍惚たらしむるよ、  
轉何如

著君浪春川押

談奇人怪

正價廿五錢  
郵稅四錢

表題人心を驚倒  
已に本書の記事推量する  
に足らん、我れか我れに  
非す彼か疑團百  
彼に非す疑團百  
出、煩悶痛苦已にして、  
なり、春風一ひ來りて堅  
氷融くるの感ありこれ一  
篇の骨子の梗概なり、其  
他の奇俠士、戰  
場の花如何に讀者を  
れしむるぞ加、圓熟の  
ふるに著者、婦女  
童幼たれば、婦女  
童幼亦その趣味を解  
するに難からず  
東京神田區鍛冶町  
十七番地  
大學館

數寫  
葉眞  
入版

(十四)

著君堂徂崎岩

弟兄の士名

正價廿五錢  
郵稅四錢

近刊

一世に快事多し、然  
第一腹一生の兄  
々たる名を博して共  
稱せらるるの快事は  
ふも本無け現今活社  
會に活動せる活社  
人物の兄弟が逸話傳  
しに記を描きたるも  
のに、立志の興  
奮劑たる事疑ふ可  
家庭必須の書  
なりといふ可し  
東京神田區鍛冶町  
十七番地  
大學館

著君山靄藤須

人夫の家名士名

正價廿五錢  
郵稅四錢

近刊

區々たる一婦人、纖弱な  
る女子遂に天下無用の長  
物たる乎、事に表裏あり、  
陽あり陰、國の盛  
衰、家の興亡  
は觀し來れ、巾幗の  
勢、力、稱名  
名士の譽、稱名  
家の功、譽、稱名  
子の功に歸す可けんや暴  
風松柏を倒さんとしてこ  
れを支ふるもの何ぞ松柏  
に其身を託する葛蘿なら  
ずや然、婦人の功  
亦冥々に附す可からざる  
東京神田區鍛冶町  
十七番地  
大學館

(十五)



早田玄洞君著

# 李鴻章

正價廿錢  
郵稅四錢

世界近代之三大豪傑は唯ぞ即ち英の獨のヒスマ、李鴻章、頃日彼れ、法然として逝く、我國兒童走名を知る而して彼に關する著作なし嗚呼これ偉人を待つ道ならんや本書は實に彼れ貧賤より起る現在の位が置に達したる迄逸話奇聞を漏以て一は立身出世の好材料とすべく一部の東洋史となす日清戦争の團匪事件一讀せざるの國民豈にや

# 豪傑叢談

洋裝  
美本

全 部 拾 冊

正價拾五錢  
郵稅貳錢

第壹編 宮崎來城君著  
多情の豪傑

第貳編 宮崎來城君著  
豪傑の臨終

第參編 宮崎來城君著  
豪傑の少時

第肆編 岩井松風軒著  
豪傑の遺訓

第伍編 宮崎來城君著  
豪傑の雅量

(十六)

## 第一宮本武藏

巖谷漣山人序  
黒田湖山人編  
日本武將お伽噺  
小島冲舟密畫  
色刷菊版美本

## 第二山中鹿之助

東京神田區鍛冶町 大學館發行

目次左の如し

○源頼朝○源義経○平重衡○木曾義仲○曾我祐成○楠正行○藤原藤房○高師直○尊良親王○高師秋○新田義貞○新田義興○平通盛○柴田勝家○平維盛○豊臣秀吉

豪傑の氣象は臨終の間に於てこれを見る、來城子獨擅の健筆を振つて無數の古豪傑が臨終を描く一讀儒夫も起つ可く鬼神も泣くべし

蛇は三寸にして人を呑むの概あり、豪傑の豪傑たるはそれ天品に依るか又聞く大器晩成の語あり豪傑の豪傑たるはそれ鍛練に依るかこれを知らんと欲せば須らく豪傑か少年時代の言語舉止に徴せよ

創業は易し守成は難し、英雄の苦心はその子孫の業に在り、遺訓を遵守するもの以て榮へ背戻するもの衰ふるは歴史に徴して明なり、有爲の青年なるもの一冊を座右に置いて朝夕の鑑とすべし

諸豪傑が亂世に於ける慣用手段たる權謀術數以外に一種の天真潤滑なヲ雅度を以て人を迎へたる絶好の逸話、茲に例の健筆を以て寫し出されたるもの一讀光風霽月の想あらん

(十七)



# 豪傑叢談

洋裝 美本 全部拾冊 正價一圓 郵金五錢 郵稅四錢

第六編 西山筑濱君著  
**豪傑の交際**

第七編 岩井松風軒著  
**豪傑の信仰**

第八編 西山筑濱君著  
**豪傑の修養**

第九編 宮崎來城君著  
**續多情の豪傑**

第十編 西山筑濱君著  
**豪傑と奥方**

交際は即ち處世法なり交際に拙なる者は世に  
運るゝは自然の數なり、異色異種の人物交々  
來り接す此間に處して如何に談話し如何に待  
遇すへきや豪傑か苦心また甚たしきものあり  
此書これを説いて些の餘蘊を見す

英雄豪傑の壯業偉蹟は實に渠れが信仰の產物  
なり、神か、佛か、人か物か、道か、理か物  
か渠等は其の一の或ものを崇拜し以て志を成  
したるものなり本書詳に之を謂ふ

大事業の下には大なる準備あり偉人の素には  
大なる修養あり修養は活動の第一義なる語  
を知る者須らく此書に就て如何に英雄豪傑か  
その素養に力むるに困苦勉勵せしむるを見よ

曩に、多情の豪傑一編を著して滿天下の耳目  
を驚倒したる著者更に其洩れたる戰國の勇將  
猛士が情事を寫す瑰奇優麗の筆致は説くを用  
ゐず讀む者恍惚として自失せずんば幸のみ

豪傑を知らんとするには先づ夫人の研究を要  
す、女子か男子に及ぼす勢力等大なるものあ  
ればなり、此書或は叙説し或は評論し俊髦と  
佳人双々點綴する處一部小説を讀むの感あり

文學士白河鯉洋君序 宮崎來城君著  
**楊貴妃**

第五版 正價廿三錢 郵稅四錢

帝國大學教授內藤耻叟先生序 黑河内與四郎君著  
**靜御前**

第四版 正價參拾錢 郵稅四錢

文學博士三宅雪嶺先生序 岩井松風軒君著  
**小野小町**

參版 正價廿五錢 郵稅四錢

松村介石君序 光井深君著  
**學生自活法**

再版 正價拾五錢 郵稅四錢

文學士梶川鳥城君序 林稻洲君著  
**理想の良人**

正價十七錢 郵稅二錢

著者風に漢文學に精通し清國に歴遊して人間未見の  
書に涉獵すること多年其瑰奇無雙の筆を以て天下無  
雙の國色を描く材料新にして麗麗の逸話蒐録して  
漏すなし一讀するもの身は二千年前に生れ面前貴妃  
か美艷に接し媚言を耳にするの感あらん

帝國大學國史科に於て、鎌倉時代國史を專攻せし著  
者が數十の奇書珍本を材料とし該博なる學識と流麗  
なる筆力とに依りて靜御前か幼時より其最期に至る迄  
極めて正確に物事を述べられたるもの殊に其關係の  
の如きは最も詳細を極むるもの坊間散漫杜撰の詳傳と  
は同一の談に在らざるなり

極美の女流として、非凡の歌仙としての小野小町が  
九十二年間の生涯の榮枯盛衰を叙したるもの材料は  
正確豐富文章は流麗暢達、從來不可思議の裡に疑感  
を留めし小町の事跡は此書に依りて始めて明晰に解  
決せられたり

都下何十萬の學生の中能く其素志を貫くもの幾人か  
ある多くは惡覺の爲めに病魔の爲めに半途にして  
郷里に歸るもの失敗するもの踵を接ぐにあらざるや  
なきか放たる都下の事情に暗きが故なり獨立闊歩の勇  
を導く專親切丁寧なこれ學海の羅針盤たりと言ふべし

此書は未婚の男女兒を持つて父母兄弟の一讀を要  
す、未だ妻を迎へざる男子の爲めに未だ嫁せざる女  
子の爲めに親切なる勸告と撰擇法を説く此書を讀み  
たるものは妻を離別するの不幸なく離縁せざる悲哀  
無双の教訓書なり既婚の婦人に向て絶好の座銘なり







文學博士井上哲次郎君題字 文學博士元良勇次郎君序  
希臘人キセノオオーン著 木村鷹太郎君譯

### テラス 人物養成譚

第四版 正價 四十四錢 郵税 六錢

公爵近衛篤磨君序 島田三郎君序 法學士桑田熊三君序 法學博士中村進午君序  
柳瀬勁助君遺著

### 社會外穢多非人

第三版 正價 廿五錢 郵税 四錢

岩崎徂堂君著

### 人物と長所

實價 廿五錢 郵税 四錢

岩崎徂堂君著

### 明治豪商苦心譚

再實價 廿錢 郵税 四錢

岩井松風軒著

### 情の清盛

實價 廿八錢 郵税 四錢

渡邊修二郎君著

### 奇傑雲井龍雄

肖像 正價 廿錢 郵税 四錢

渡邊修二郎君著

### 俠傑高田屋嘉兵衛

肖像 正價 廿錢 郵税 四錢

押川春浪君著 寫真版挿入

### 航海奇譚

再 正價 廿五錢 郵税 四錢

柴田流星君著 寫真版挿入

### 海之冒險

正價 廿五錢 郵税 四錢

き何等の快事ぞ、海國の男兒は敵なき海に死せざるなり、

◎本書は「フランクリン」無二の愛讀書なり◎本書は聖哲ソクラテースが單身市井を徘徊し快妙の方法により各種各異幾多の人物を養成したる奇絶の事業談なり◎本書は「ソクラテース」の性行、經歷、逸事は残らず網羅せり◎本書は西洋論語として其名高く歐米諸國教育家が必ず一本を携帶せざるなしと云ふ全力を盡して穢多非人の生活、信仰、道徳、婚姻、職業、交際、起源、人口繁殖、沿革、過去、將來、救濟法を研究し、其結果を公表するに至らずして遠逝せられし柳瀬勁助氏の遺著にして別天地たる該社會の奇習一として洩らすことなし

此書に掲ぐる人物は皆是れ現時社會に活動せる活人物にして其長所を描く極めて警拔適切其間滑稽あり奇智あり、膽力あり、血あり、涙あり百名士百長所は彩霞白霧の間に點綴して天地の壯觀を呈す

人間を観察するに最も趣味あるものは、是れ情也日折花の逸樂と言はんや、何ぞ柳の歡興と言はんや、著書が暢達せる筆は此一怪傑に生命を與へて如何に能く百花の爛熳たる春光を此書の表に現出せしめんとするぞ

渾身皆膽、奇言奇行、眇たる一書生の身を以て徒手破天驚地の壯學を試み、終に奇禍を得て刑場一片の露と消へたる明治初年の快男子雲井龍雄が幼時より其斬首に至る間の性行、奇事を輯めて一編の傳となしたるもの附録に雲井龍雄文詩を掲ぐ

嘉兵衛是れ市井の一夫のみ、而して國家の爲に犠牲となりて海外に捕はれ、毫も國譽を辱しめず一縷千鈞の難關に處して彼我の間を呼罵ぞ傳せざる可けり、和事局を結了するを得たり、嗚呼、得せざる可けり、和事者、頭日露人の記録等を得て材料頗る豊富なり、日露文渉の事蹟は其多趣多味なること遙に小説神史の上在り

大洋と言ふ已に快也、航海と言ふ已に壯也、奇譚といふに至つては競うて讀まざる能はず、太平洋を馳る船大西洋に沈む船甲板に起りたる神鬼出沒の活劇、奇絶にして趣味多く快絶にして感興甚だし、活劇、目一海上の怪、孤島の奇遇、幽靈島の貴婦人、海軍次一士官、無名の碑、俠血男兒、二人胡弓師、

英國の少年は好て冒險小説を讀む、而もその重なる中日を見ざるものなり、英吉利本國の人々か四六時の日本に關するなすと誇るに至る亦宜哉、海の冒險は海へたるもの金華山沖に暴風と戦ひ、占守島に郡直は海と談し、露領コマンドルヌキ島に萬歳を唱ふるが如



博言博士イーストレイキ君著

英作文添削詳解

再 正價廿三錢  
版 郵税二錢

「イ」氏門生の英作文數多を撰擇して、字々句句に精密の添削を加へ、其全文には全體の評論を下し、以て英作文練習の方針を示し、邦文を以て添削評論の理由を詳説したる英學界未曾有の珍書なり。

博言博士イーストレイキ君著

英和通辯 日用單話自在

第三版 正價參拾錢  
版 郵税四錢

英米日用の慣用語句一千數百を集めて之を二十種に類別し同氏自ら正確の發音を施し加ふるに末尾に單語數百をも類別に附しあれば初學者は勿論特に中學生徒右必須の良書なるべし。

菅野徳助君著

フランクリン 自叙傳詳解

再 正價參拾錢  
版 郵税四錢

國民英學會講師として一實用英語一記者として英文の註譯を以て芳名噴々たる菅野氏が其精緻なる頭腦により詳密の註解を下せしものなれば坊間流布の蕪雜の書と其の選を異にするは勿論實に中學生必携の書。

文學士宮本正貫君序 虎城山人編

作文必携 助字用法詳解

第四版 正價十五錢  
版 郵税貳錢

也、矣、焉、乎、哉、耶、耳、爾、已、殆、哉、蓋、夫、抑、即、乃、厥、即、便、猶、尚、仍、等、の、助、字、數、百、を、類、集、し、各、字、の、意、義、用、法、異、同、等、皆、實、例、を、擧、げ、詳、説、せ、り。

侯爵西園寺公望君題字 岡鹿門君序 財間榮君編

作文必携 熟語成句詳解

第四版 正價廿五錢  
版 郵税四錢

故、字、熟、語、數、千、を、集、め、て、之、を、精、密、の、意、義、文、字、の、出、處、故、事、來、歴、を、詳、説、し、て、之、を、一、別、に、區、別、し、尙、ほ、索、引、に、便、なる、爲、め、種、類、目、録、を、も、付、し、あ、れ、ば、引、用、に、便、に、し、て、文、筆、に、從、事、せ、る、も、の、座、右、必、須、の、要、典、なり。

文學士宮本正貫君序 虎城山人編

漢文速成 和文漢譯秘訣

正價十五錢  
郵税貳錢

和語を漢語の語勢に變更する練習法なり復文十數例を一擧げて實字、虛字、助字の用法及語句の轉倒配置を一字一字詳説し又譯文の異同を識別し譯文の運用變代を會得せしむる爲同一文を數種に漢譯したる名家の和文漢譯例を示し譯文の方法秘訣を詳説せり。

法學士 加藤正雄君序 南海道人編 (挿畫三十二個)

書法秘訣 習字速成圖鮮

再 正價十五錢  
版 郵税四錢

本書は永字八法、草字筆法、一文字五形修練術、忍返筆、委實習字、四修、習字文學之圖、筆勢、筆拍子、去、欣、黑色生字、死字、病字等の秘訣、魏太祖、王羲之、晉成帝、柳公權、東坡等の書法極意より書體の種類、筆道の用具に到るまで詳細不漏。

涵養社編纂

現代大家 青年の憲法

第三版 正價廿錢  
版 郵税四錢

如何にせば成功すべ乎、滿都幾萬の學生が日夜焦慮する問題は不幸にして往々解決せざるものあるは何ぞこれ精神を頹みずして青年の形式を學べばなり、本書に此等の弊を矯めて青年の福音たるを得べき乎十二大家の青年教育談は本書獨得の記事なり。



涵養社編纂

中學新式勉學要訣

正價廿五錢  
郵稅四錢  
學を務むるに法あり法を誤れば貴重なる時間と莫大なる金銭とを散りて得る所零のみ本書は此の弊害を矯めて偏に青年が勉學の指南たらんを務めたるに中學生には宜しき參考書たるを得べし

西山筑濱君著

戰國時代少年武者

正價廿五錢  
郵稅四錢  
少年武者が活動は果して如何筑濱君の筆これを描いて面目躍動せんとす腥風血雨の巷その緋威の如何に如何に勇ましき月光花影の下その小姓姿の如何に愛らしきよ

岩崎徂堂君著

名士の兄弟

正價廿五錢  
郵稅四錢  
世の中に愉快なる事少なかられど其中にも一つ腹から生れ一つ處で育ち一つ乳房を吸つて一つ學校に通つた兄弟が漸々と成長して共に青雲の地位に昇つた程愉快な事はあるまいこの書は現今有名な人に達が兄弟の傳記を面白く描いたもので讀む人の爲めに大に立志の興奮劑となるであらふ

須藤露山君著

名士名家の夫人

正價廿五錢  
郵稅四錢  
古今東西名を擧げ産を興すの人士はそれが夫人の内助扶掖に依るもの多し世に關する名士の傳記逸話の行はるゝや久し、獨り夫人に關するもの無かる可けんや本書叙筆平易にして項目頗る饒多讀んで面白く且つ有益なり

押川春浪君譯著 寫真版數葉入

世界怪奇談 第二編 世界武者修行

正價廿五錢  
郵稅四錢  
如意棒を提けて天下を横行する快男兒が驚天動地の活動は如何、碧眼驚き豚尾仰天す壯快痛絶

平野紫陽君著

文學奇瑞談

正價廿五錢  
郵稅四錢  
天地を動かし、鬼神を泣かしむ和歌の功大なる哉武士夫婦の情を和ぐる俳諧の徳偉なる哉和歌俳諧の功徳は更に言はば文章詩歌が神佛を感應する功徳眞々の中争ふ可からざるものあり 本書は古來歴史上の奇瑞不思議の逸話を蒐録せるもの消閑の具には無比の如著にして又得易からざる參考書なり

巖谷漣山人序 生田葵山人著

少年進擊隊

寫真版挿入  
正價廿五錢  
郵稅四錢  
生田葵山人が「少英雄」を繕きたるものは必ずやこの「進擊隊」を讀まざるを得ざるべし、少年の血氣向ふ所鬼神を泣かしめ、山嶽を感動し好箇の少年山人の筆に依り愈々活動し破天荒の事業を演出せんとす、挿畫鮮麗亦以て机上の珍とするに足る

宮崎來城君著 岡落葉君筆寫真版數葉入

無錢旅行

著寫真版 三正  
廿五錢  
郵稅四錢  
旅行の面白味は汽車に在らず、汽船に在らず、馬に在らず、車に在らず、所謂徒歩無錢にして千山萬壑を跋渉する中に在り風を餐ひ露を飲み食と合宿するなど辛苦の中に忘られり趣味の存するものあり、此書世に出で、忽ち數千部を賣り盡せり以て如何に壯快なる價物なるか知れ



宮崎來城君著 岡落葉君筆寫真版數葉入

### 乞食旅行

正價廿五錢  
郵税四錢  
腹に高巻の書を貯へながら旅行のしたさに缺腕を片手に乞食の仲間入して彼處此處と經廻つた。歴談である。三日したうか來城氏の無錢旅行を讀んだ人はその趣味の多い事を悟るであらう。

矢野滄浪君著 寫真版挿入

### 無錢旅行 食客

正價廿錢  
郵税四錢  
本書は著者が實踐せし事柄を言文一致を以て描かれたるものにして食客が辛酷困苦の境遇不平憤懣の生活讀むものにして身その中に在るの感起さしむるに近時片々たる駄小説に比して趣味優ること數番なし。のみならず其學の書生に慰樂を興ふること甚だ多

巖谷漣山人著 生田葵山人著 寫真版數葉挿入

### 少年小説 少英雄

正價廿五錢  
郵税四錢  
生田葵山人が少年小説に獨得の筆を有するは既に文壇の公評たり。此書は山人が田園生活數ヶ月間に於ける苦心經營の作數篇を蒐めたものにしてその無邪氣にして勇氣あふその天真にして快活なる篇中の主人公は如何に少年諸君が敬慕する所なるか試に讀してその好伴侶たるを知り玉へ。

原田東風庵著 小山榮達君著

### 木賃宿

正價廿五錢  
郵税四錢  
社會下層の狀態を描いて精細、苟くも貧民問題勞動問題に關して齟齬するの士は一讀せざる可からざるの書なり社會の暗面を露ぼんする詩人は最も適切な參考書なり。

長田偶得君著 岡落葉君畫 三版

### 逸事奇談 明治六十大臣

正價廿五錢  
郵税四錢  
明治十八年内閣制度改革以來今日に到る迄の大臣六十人の逸事奇談を描きたるもの大禮服きて威儀嚴然たる大臣は横鼻禿僅一枚の裸男となりて讀者の前に現れる可し。

岩崎徂堂君著 岡落葉君畫 三版

### 中江兆民奇行譚

正價廿五錢  
郵税四錢  
明治の奇男兒中江兆民居士が奇言奇行を描きたるもの滑稽あり嘲罵あり諷刺あり狂態あり一讀卷を捨つるに及びす。

押川春浪君著 岡落葉君畫

### 世界怪奇談 第一編 奇人の旅行

正價廿五錢  
郵税四錢  
世界怪奇譚の第一編として著書の尤も苦心する所冒險思想を著の旅行の趣味を解し世界的知識を得るには尤も趣味多くして有益なる書なり。

押川春浪君著 岡落葉君畫

### 怪人奇談

正價廿五錢  
郵税四錢  
表題已に入目を驚かすより見ても如何に記事の奇怪なるを推想するに足らん人外狂、奇狂士、騷場の花々々詩趣ありて、讀者をして飽く事を知らしめず。



緒方流水君序 石橋玄潮君著

### 新體詩指南

正價廿五錢  
新體詩の性質を明にし、其作法を詳説し、附する語  
之が模範たる作例と、之を組織すべき資料たる類に  
を蒐集したるもの、新體詩自修の指南車は本書を措  
て何れにか之を求めん

石橋玄潮君編

### 花天月地

正價廿五錢  
本書收むる所は當時有名の新體詩人の作にして其華  
を抜き其精を選ひて之を集む、其數七十有餘、當に  
是れ四時花鳥風月の友天地の有情を教ふるもの、即  
ち之なり

文學士栗田木岡君序 渡邊幾石君編

### 美文資料 美辭麗句

再正價廿錢  
本書は部門を季候(春、夏、秋、冬)地理、天文、人品、品  
性、人情及人事等に分ち更に百有餘の細目に分ち以  
て索引の便を計れり蓋し作文の好資料にして苟しく  
も文筆を弄するの士が座右の友として裨益少なから  
ざるを信す

國府犀東君序 香川怪庵君述

### 文士政客風聞錄

正價拾五錢  
方今其名噴々たる政治家、文豪が奇話珍聞を蒐めた  
るもの、滑稽あり、洒落あり、豪放あり、奇矯あり、  
風流あり、慷慨あり、面目躍如として紙上に活躍す、  
郵稅貳錢